

TOTO

2010年 新春号

Toward a Creative
Architectural
Scene

通信



Special Feature
Controlling
Lines
of
Sight

特集 視線の操作

線の操作



| | | | | |
|------------------------|----|------|---|----|
| 6つの住宅の設計手法を聞く | 4 | シリーズ | 旅のバスルーム 76 文 スケッチ/浦 一也 ホテル ザッパ ウィーン(オーストリア ウィーン) | 46 |
| 「屋内の家+屋外の家」保坂 猛 | 18 | | 現代住宅併走 13 文/藤森照信 西沢大良の「源訪のハウス」 | 48 |
| 「カタガラスの家」武井 誠+鍋島千恵/TNA | 24 | | 最新水まわり物語 22 丸の内パークビルディング+三妻一号館 | 54 |
| 「RSH 3」岸本和彦 | 30 | | 地域に生きる会社 49 フクヤ建設 | 58 |
| 「house I」宮 晶子 | 36 | | TOTO出版が20周年を迎えました | 60 |
| 「国領アパートメント」小川広次 | 42 | | news file | 62 |

特集

視

視線をコントロールすることが建築の重要課題になったのは、いつ頃からだろうか。今や視線は建築設計上の欠かせないファクターのひとつだ。時に見たいものを見るために、時に距離を生むために、あるいは空間の意識を新たな世界に移動させるために。狭小住宅設計の手法のひとつと信じられてきたことが、新鮮な空間創造に不可欠な手法と意識化されるまでになっている。あらためて検証してみる、建築上の視線の操作。

Special Feature / Controlling Lines of Sight



TOTO
通信

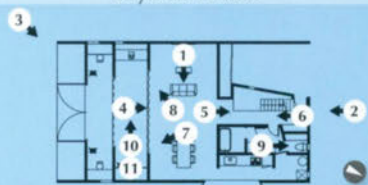
Toward a Creative
Architectural Scene
Number 489
New Year 2010

Contents

- | | |
|-------------|--------------|
| 特集1/インタビュー | 五十嵐 淳さんの視線と光 |
| 特集2/ケーススタディ | 狭小に距離を生む別棟 |
| 特集3/ケーススタディ | 視線は斜めに、立体迷宮 |
| 特集4/ケーススタディ | 閉鎖と開放の視覚 |
| 特集5/ケーススタディ | 壁はよどみなく視線を流す |
| 特集6/ケーススタディ | 9坪に仕掛けた視線と動き |

新鮮な建築空間が、視線の操作によって生まれている。そんな仮説を立てたときに思い浮かぶ建築家のひとりとして、五十嵐淳さんがいる。発表された作品から感じられる、独特のアプローチによる視線と空間の関係。光のコントロール、視覚を利用した心理的・物理的距離の取り方。その多様な設計手法の真意を、現地取材した「間の門」をはじめ、6つの住宅を通して語ってもらった。

“Layered House”



1 表紙から9ページまでの写真はすべて「間の門」。写真の番号は、上の図面に示したカメラのアンクル。写真①は、リビングダイニングの西側から東側を見たところ。表紙、および2～3ページの写真は、北側から南側の庭を見通したもの。門型の壁が庭に向かって狭くなりながら重なり、半透明のカーテンの開閉によって、視線と光の拡散をコントロールしている。②道路側から見る。外壁はガルバリウム鋼板大波板張り。③南側にテラスと庭。テラス上部には1,820mm張り出した軒が設けられている。

んの視線と光

インタビュー



3 南西側外観

2 北側外観

6つの住宅の設計手法を聞く

五十嵐 淳さ



図面番号 8 書斎

図面番号 6 玄関ホール見下ろし

図面番号 4 リビングダイニング北側



Part 1

間の門

あわいのもん

写真④客間から北方向（リビングダイニング、玄関ホール）を見る。⑤小上がりのある玄関ホール。奥が玄関。⑥2階から玄関ホールを見る。⑦オーガンジーのカーテン。3枚が重なることで、限りなく不透明に近づき、外部 内部両方向からの視線を制御する。⑧門型の壁の両脇に、さまざまな「居場所」が設けられている。舞台袖に隠れるような居場所。⑨トイレ。⑩客間の東側にある収納スペースから見たところ。⑪写真⑩のカーテンを2枚開けた状態。庭とリビングダイニングのあいだに3つの緩衝空間が配置された。ひとつ目は左手カーテンの外側のテラス、ふたつ目は勉強スペース（サンルーム）、3つ目に書斎兼客間。各スペースは階段状に床レベルが約350mmずつ変えられている。庭に向かって床面を下げていくことで、奥行きと広さに対する感覚を拡張しつつ、視線を下げて庭の縁に誘導。また、門型の壁はエッジを45度に角をとって、光をスパッと切り取る。



図面番号 9 トイレ

図面番号 7 カーテン

図面番号 5 玄関ホールと小上がり

半透明なものを
重ねていくと
限りなく不透明に近づく



図面番号 10 室内西側(カーテン閉)



図面番号 11 室内西側(カーテン開)

状態だけに興味がある

——五十嵐さんの作品を拝見すると、視線の扱い方を重視していて、最近箱のつなぎ方で距離を出しているように感じます。そういったことは、セオリーとして意識化しているのですか。

五十嵐 淳 方法論やプロセスを追って答えを導き出すのは避けています。なにか到達する前に到達点が見えてしまうのがいやで、なるべくそういうことは考えずに設計を試みるんです。それから設計していく過程で、決めるべきことはなるべく後に、ざりざりまで決めたくない。素材とか色とか、施主との打ち合わせのタイミングまでは、時間を使ってわざと迷おうとしています。いろんなことを見出せる方法として、時間があればまた違うことを考えられるのではないかと気が持ちがあります。

——セオリーはないようにしたいのでしょうか。

五十嵐 そうですね、自分のセオリーではなくて、その地域とか場所でのセオリーみたいなものを見出したいという夢はありますが。ただ、手癖みたいなものには逆らわないようにしたい。そこに逆らうと、自分の設計ではなくなってしまうんです。そして、違和感を消すということは心がけています。なんかちよつと気持ち悪いなあということは、可能な限り減らすように考えますね。

——この頃、若い建築家の事務所に行くと、膨大な数の模型をつくっています。五十嵐さんはいかがですか。

五十嵐 模型は必ずつくりますが、頭の中でシミュレーションできるものは、模型で膨大なスタディをしても意味がないのでつくりません。僕はスケッチの段階から、平面、断面、ディテールを同時に考えるんですけど、2、3案をつくった時点でスタッフに渡し、模型に立ち上げてもらいます。プロセスというのは事後報告みたいなものでいいと思っています。

——今回のテーマについてというと、五十嵐さんの作品は、窓から外を見ると感じるあまりしないのですが。

五十嵐 ええ、そういう意識はまったくないんですよ。ピクチャーウィンドーとか、窓から外の風景を切り抜くというのは、あまり信じない。あくまで光と風を取り入れるための、窓というよりは開口をどうするかという意識なんです。

その居場所が ほかの居場所と 視覚的にどうつながるのか

Igarashi Jun

Special Feature

Controlling Lines of Sight Chapter 1

——すごくいい景色に立っている住宅もありますよね。

五十嵐 何が見えるかは気にしませんね。そこは絶対ではないですから。外に出ていけばいいと思いますよ、家の中から眺めなくても(笑)。光が大事です。光が壁にどう当たって、それがどう反射するかということが最も気になる。そこは模型でシミュレーションをします。スチレンボードに銀紙やアルミホイルを張って透けないようにし、光を当てて検討します(例/15ページ模型写真)。

——以前から「居場所」といういい方をされていますね。

五十嵐 はい、住宅に限らず建築空間の中では、移動することより留まることのほうが重要だと思っています。それを居場所と言っています。居場所の設定がまず大事で、その居場所がほかの居場所とどう視覚的につながるのか、どう関係性が発生するのが重要だと思っています。それから、居場所もそこがずーっとリビングであるといった設定はなるべく避けて、多様な感覚をどの居場所でも受けられるようにしたい。それには、光を重視すると同時に、視線の抜けとか見え方を考えていきます。

——また、「環境」ではなく「状態」が重要だとよく発言されていますが、そこにいたくなくなったり、留まりたくなったりする状態をどうつくるかということでしょうか。

五十嵐 まさにそうですね。状態をつくるための与条件を、いろいろな操作でつくっているのかもしれないですね。状態のみに、僕はたぶん興味があるんです。どういうプロセスや手法を踏もうが、結果として状態が大事だと。それは空間ということですね。

——では、具体的な住宅作品についてお聞きしていきます。

1 Part 距離の拡大、 半透明のレイヤー

「間の門」 2008

——「間の門」にうかがったとき、すごい空間のボリュームに圧倒されました。リビングダイニングから先は、幅が9・1m、高さが4・7×5・4mもあります。部屋というより、そこを満たしている空気の塊みたいなものを感じました。

五十嵐 北の道路側は一般的な2階建てよりずいぶん低いんで

間の門 あわいのもん

| 建築概要 | |
|-------|------------------|
| 所在地 | 北海道常呂郡 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦+子ども2人 |
| 設計 | 五十嵐淳/五十嵐淳建築設計 |
| 構造設計 | 長谷川大輔構造計画事務所 |
| 施工 | 五十嵐組 |
| 構造 規模 | 木造 地上2階建て |
| 敷地面積 | 496.77㎡ |
| 建築面積 | 150.71㎡ |
| 延床面積 | 202.26㎡ |
| 設計期間 | 2007年4月~11月 |
| 工事期間 | 2007年12月~2008年8月 |

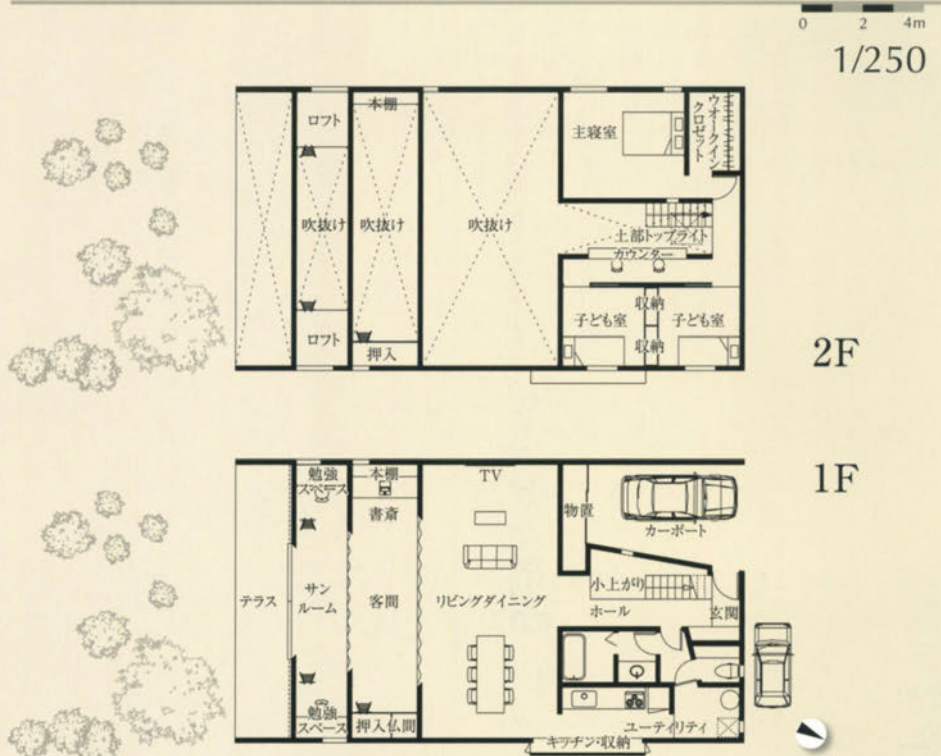
| おもな外部仕上げ | |
|----------|------------------|
| 屋根 | ウレタン塗膜防水(躯体絶縁工法) |
| 外壁 | ガルバリウム鋼板(大波) |
| 開口部 | 木製建具、樹脂建具、スチール建具 |

| おもな内部仕上げ | |
|-------------------|---------------|
| リビングダイニング | |
| 床 | フローリング t=15mm |
| 壁 | ビニルクロス張り |
| 天井 | 野地板現し |
| 客間 書斎 収納スペース | |
| 床 | 麻 t=6mm |
| 壁 | ビニルクロス張り |
| 天井 | 野地板現し |
| キッチン ホール 廊下 | |
| 床 | フローリング t=15mm |
| 壁 天井 | ビニルクロス張り |
| トイレ ユーティリティ 脱衣洗面所 | |
| 床 | P タイル t=2mm |
| 壁 天井 | ビニルクロス張り |
| 主寝室 子ども室 サンプルーム | |
| 床 | P タイル t=2mm |
| 壁 | ビニルクロス張り |
| 天井 | 野地板現し |

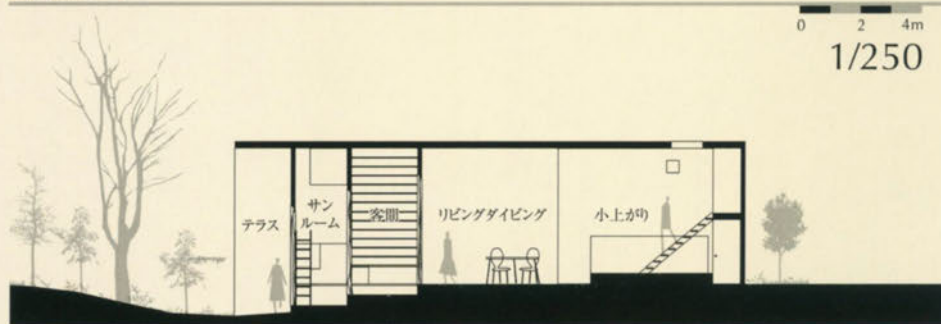


北東側外観。北海道の東、佐呂間町の古い市街地に位置し、交通量の多い道路に面している。右手の切妻の建物は農協の倉庫。

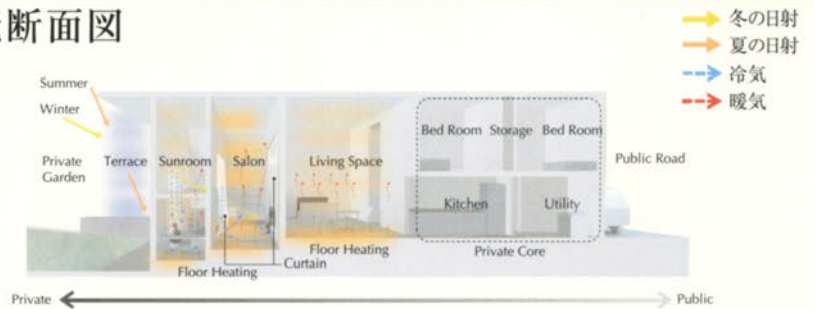
平面図



断面図



熱環境断面図



階段状の断面構成により、冷気や熱は溜まらず、リビングスペースは快適な熱環境が保たれる。

す。中に入って、谷のような吹抜け通路の先に、あるポリュームが現れます。南側の奥に行くほど天井高も大きくなるので、そういうエアボリュームは感じるでしょうね。テラスを含めてこの空間だけで50畳くらいあるので、物理的にも広いんです。この敷地はまわりが建物に囲われていますけれど、住宅としては十分な敷地面積だったので、とにかく大きな空間をつくらせてあげようという意図はありました。

それから、もともと地盤レベルの低い奥の庭とリビングとをどうつなぐかと考え、バッファア、緩衝空間のヒエラルキーをつくらうというのがスタートでした。

屋外の庭があつて、半屋外的な縁側のようなテラスがあつて、あまり断熱性能がよくない両引きのサッシを挟んで室内になります。

そこで、サンルームと、もうひとつのスペースを熱環境的なバッファアにし、3つのレイヤーを通してリビングダイニングに到達するという構成を考えました。サッシ面ではコールドドラフト（*1）が起こりますが、冷気は床の段差を乗り越えてこないんです。またサンルームにも床暖房が入っているので、ガラス面を下りてきた冷気をあたためることができる。もうひとつは、カーテンはかなり断熱性能があるので、それが3枚重なることで空気溜りが確保されますから、空気の温度変化が救えます（9ページの熱環境断面図参照）。

また同時に考えたのは、そういう構成をするのなら、門型をつくって、視線を下に向けようということです。奥はご両親の家の庭なんですけど、その先のほうには雑多なものがありますから、下方に向かって絞っていくような視線をつくりたかった。そして壁のエッジは45度を角をとって、光をスパッと切り取る。「光の矩形」（2007・11ページ参照）でよい効果が得られたので、ここでも使っています。

—— 壁厚を見えないようにしようということですね。

五十嵐 そうです、そうするときにラインが出るので。

また、客間がほしいという要望に応じてリビングの 部を泊まれるスペースにしたり、書斎や子ども勉強スペースや収納を正面から見えない位置にセットしたりと、細かな要件も同時に解いていきます。自分なりに違和感のない形にするために、行ったり戻ったりという作業をずいぶん繰り返しました。最初から、門型が連なって庭に到達するといったビジュアルを描い

写真

A Annex (2005)



*2 凍結深度

寒冷地において、冬季に地表から下に凍結する深さのこと。基礎のフーチングや水道本管からの横引き給水管は、それより深いところに設置する必要がある。この住宅の場合は60cm。

*1 コールドドラフト

冬季のとくに夜間、室外の冷たい空気により窓ガラスの室内側表面が冷える。その付近の室内空気も冷やされて生じる下降気流のこと。足下の冷気による不快感につながる。

ていたわけではありません。

—— これを見ると、ステージ、それも内側から見るとステージだと思えました。紗（オーガンジー）のカーテンからもそんな印象を受けます。

五十嵐 ここでは拡散光を取り入れたいというのがまず重要で、それも可変的にしたかった。固定したものなら、「矩形の森」（00・17ページ参照）のポリカーボネイトとか、「Annex」（写真A）のFRPと寒冷紗とか、あるいは型ガラスでもいいんです。ただこの大きさの建具となると、コストも膨大ですし動かすのも大変です。そうすると、カーテンのような簡易なものが一番適している。

半透明なものを重ねていくと、不透明に限りなく近づいていって、光の具合もずいぶん変わってきます。「大阪現代演劇祭仮設劇場」（04）ではポリエスチル製のエアチューブとオーガンジーを使い、北方民族博物館の展示構成「density」（写真B）では農業用寒冷紗を17層のレイヤーにしました。寒冷紗の中を進んでいくと、だんだん透明度が上がって向こうが見えてくるんですが、振り返ると最初と同じ状態になる。そんな経験もフィードバックして使っています。

—— 東西面にも小窓はあるんですね。

五十嵐 ええ、最低限の換気窓を付けました。あまり強い光は入れたくなかったのですが、袖壁の脇から若干光が入るのは悪くないと思えました。型ガラスの外側に、外壁の波形と同じ断面のFRPを張ったすべり出し窓なので、これもほぼ拡散光になっています。

—— ここでは、デザインと構造がすごくうまく合っていると
思います。壁もすごく薄く見えます。

五十嵐 構造家はいつもお願ひしている長谷川大輔さんで、標準的なツーバイフォー、枠組壁工法です。壁厚は普通ですが、空間が大きいのでそう見えるかもしれません。ただ、番手前の門型では、木造で5200mmくらいのスパンを飛ばしていますから、成が5400mmというテーパーみたいな梁が入っています。積雪荷重もかなりかかっています。

—— なるほど。門型は設えみたいに見えますけれど、それがないとこの空間は構造的にもたないわけですね。

五十嵐 ええ、短辺方向はほとんど壁がないので、この袖壁で押さえているわけです。

Part 2

—— 先ほど少しお話の出た「光の矩形」です。これは都市型の立地ですね。
五十嵐 札幌で初めて建てた住宅で土地が35坪。それも風致地区なので、建坪は12坪しかとれません。物理的に外形が決まるのは、こんなに楽なものか(笑)と思いました。パツファーズ

緩衝空間は 拡散光の大きな穴 「光の矩形」 2007

Part 2

光の矩形 Rectangle of Light



光の矩形
ひかりのくけい

建築概要

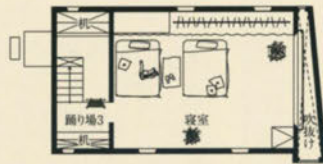
| | |
|-------|------------------|
| 所在地 | 北海道札幌市 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦+子ども2人 |
| 設計 | 五十嵐淳/五十嵐淳建築設計 |
| 構造設計 | 長谷川大輔構造計画事務所 |
| 施工 | 大岡産業 |
| 構造 規模 | 木造 地上2階建て |
| 敷地面積 | 119.20㎡ |
| 建築面積 | 39.40㎡ |
| 延床面積 | 71.54㎡ |
| 設計期間 | 2006年11月~2007年9月 |
| 工事期間 | 2007年9月~12月 |



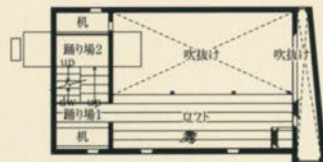
写真上/北西側外観。写真中/南東面に設けられた細い吹抜け。両サイドのガラス面から光を取り込み、壁で拡散された光を室内に届ける。写真下/玄関側から見る。白く光る四角の開口部(ガラスは入っていない)の奥が吹抜け。

平面図

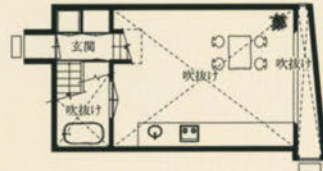
0 2 4m
1/250



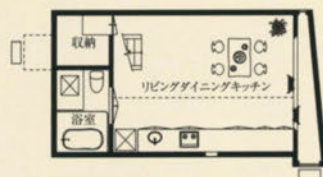
2階上



2階下



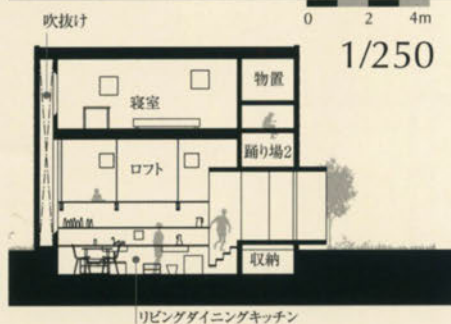
1階上



1階下

断面図

0 2 4m
1/250



リビングダイニングキッチン

写真 B
density (2007)



ーンを四方にとって入れ子にしようと思いましたが面積的に難しく、南と北にパツファーズゾーンを残しています。これも、光の矩形をつくるのが目標ではなく、屋外とどうつながるかとか、床面積が小さいなかでどう天井高をとるかとか、そういう与条件を僕なりに解いていってこうなりました。こうなりました、というの、投げやりな設計に聞こえますけれど(笑)、そうした流れのなかで進めることが多くて。断面的には、凍結深度(※2)の分を掘ってしまい、天井を高くとりました。地下部分は熱環境としても比較的安定するので、積極的に使っています。リビングダイニングと南側のパツファーズとのあいだには



相間の谷 そうかんのたに

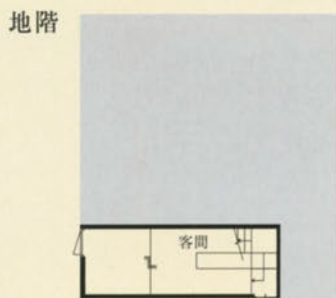
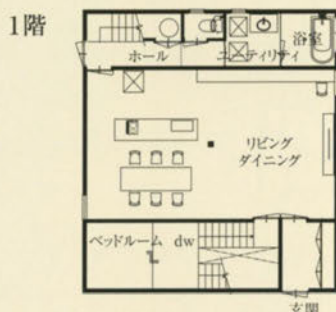
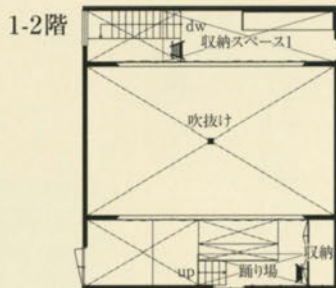
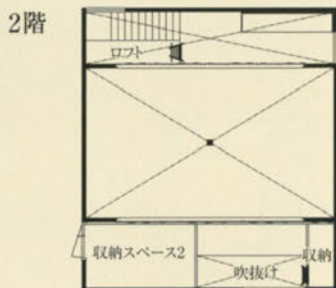
| | |
|-------|------------------|
| 建築概要 | |
| 所在地 | 北海道河東郡 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦 |
| 設計 | 五十嵐淳／五十嵐淳建築設計 |
| 構造設計 | 長谷川大輔構造計画事務所 |
| 施工 | 山田建設工業 |
| 構造 規模 | 木造、一部鉄筋コンクリート造 |
| | 地下1階、地上2階建て |
| 敷地面積 | 208.06㎡ |
| 建築面積 | 74.52㎡ |
| 延床面積 | 98.44㎡ |
| 設計期間 | 2007年1月～10月 |
| 工事期間 | 2007年10月～2008年3月 |



写真上／南側外観。手前は鉄工所の作業場。写真中／南側ベッドルームからリビングダイニング越しに北側ロフトを見る。写真下／北側収納スペース1から南側を見る。南北にパufferゾーンを設けて、拡散光をリビングダイニングに導いている。南北の関係は、自分の家の窓からひとの家の窓を眺めるような感覚。

平面図 1/250

0 2 4m



断面図 1/250

0 2 4m



腰壁を立ち上げて、空気溜りをつくりました。南側のパufferゾーンは、吹抜けの光溜りになっています。リビングダイニングとのあいだは大きな穴で、ガラスも何も入っていません。このエッジを45度に切ったことで、光がスパッと、よい効果で見える。ここにも垂れ壁をつくって、同じ条件でまわそうかと思いましたが、天井が吹抜けにつながっていく上昇感を断ち切ってしまうのでやめました。パufferゾーンの両サイドをガラス張りにして、向こう側の壁に当たった光を入れたのは、拡散光を得るアイデアの環です。壁をちよつと斜めに振ることで、光がうまく当たるだろうと考えました。またサイドの窓の大小は、周辺に若干の庭がある側は光の効率がよいので90cm幅と広くし、それが望めない側は45cm幅としています。広いガラス面が平面上で飛び出しているのは、このエッジとガラスの距離をなるべく大きく取ると効果的に拡散光が

Special Feature

Controlling Lines of Sight Chapter 1

吹抜け越しに交わす視線 「相間の谷」 2008

得られると思ったからです。

「相間の谷」についてうかがいます。

五十嵐 ここは、隣に鉄工所の作業所があったり、周囲がどういふ状況に変化するかがわからない。そこから影響を受けない解き方をまず考えて、外周部から距離を取ったリビングダイニングをつくろうと思いました。やはり南北にパufferゾーンをとって、5・6mの天井高を確保しました。

こうしたプランは都市型住宅でもよく見ますが、スケールが全然違うんですね。リビングダイニングの平面が8・2m



げんやのかいろう

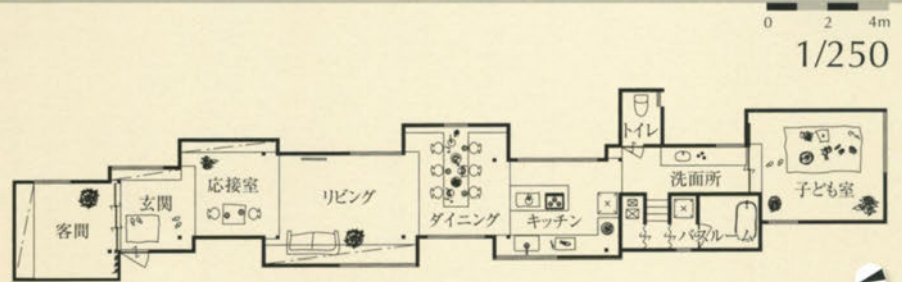
原野の回廊

建築概要

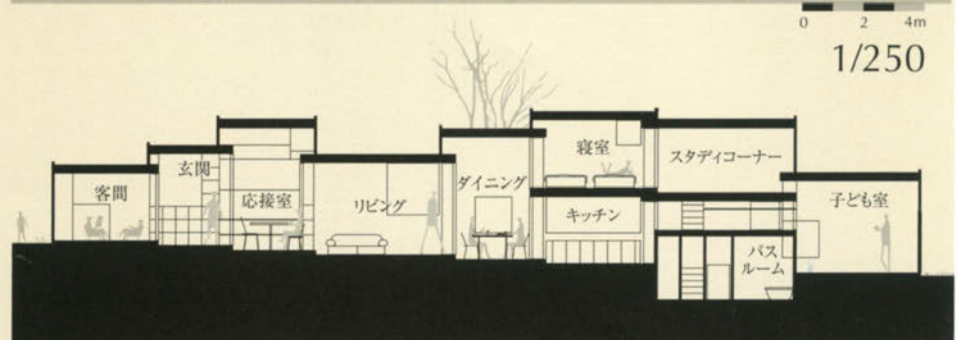
| | |
|-------|------------------|
| 所在地 | 北海道野付郡 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦+子ども2人 |
| 設計 | 五十嵐淳/五十嵐淳建築設計 |
| 構造設計 | 長谷川大輔構造計画事務所 |
| 施工 | 五十嵐組 |
| 構造 規模 | 木造 地上2階建て |
| 敷地面積 | 20,000㎡ |
| 建築面積 | 101.58㎡ |
| 延床面積 | 131.60㎡ |
| 設計期間 | 2005年4月~11月 |
| 工事期間 | 2005年11月~2006年5月 |
| 総工費 | 25,000,000円 |

写真上右/ダイニングから玄関方向を見る。天井高や壁が変化し、ずれながら、各部屋がつながっている。写真上左/西側外観。全長約28m。

平面図



断面図



写真上/北端の客間から、玄関、応接室、リビング、ダイニング、キッチン、上部に寝室、最奥(南端)の子ども室までを見通す。

×5mですから。

五十嵐 スケールのメリットというのもその場所でのコンテクストだと思うので、解き方として最大限に使いたい。ここではバツファーンゾーンの木造床を薄くして、15cmくらいの厚さでかなりのスパンを飛ばしています。光をバツファーンゾーンの窓から入れて床や天井に反射させ、リビングダイニングとのあいだの開口から取り入れる。この床は、内部の庇みたいな感じになっっているんです。そこにカーテンをつけたのは、光をさらに拡散させるということと、熱環境的にバツファーンの負荷が大きいので空気をいったん遮断するという目的がありました。カーテンは壁厚の中に納まっています。

—— 南北のバツファーンゾーンは半層くらいレベルがずれていますね。視線が自由に動きまわれるという感じがします。

五十嵐 そうですね。南北の関係は、自分の家の窓から、ひとの家の窓や隣のファサードを見ているような効果が出ました。ただ、それは結果論に近いです。

この大きな開口から、向こうで拡散された光をどう入れるとか、熱をどうするかといった、物理的な要件をきちんと解こうとしています。レクチャーでもこういう話ばかりするんですけど、そうすると学生さんが、私でもつくれちゃうと思いましたが(笑)。確かにそのとおりなのですが、こういう解き方は必然だと思っています。最初にコンセプトや形態があるというのは、僕は抵抗がある。建築をつくる理由が、建築家の必然性ではないところで決定されていくものにしたいたいという気持ちがあります。

4

Part

「原野の回廊」 2006

—— 「原野の回廊」のお話をお願いします。

五十嵐 こういう広大なロケーションは、北海道にいてもそんなにありません。以前の「風の輪」(写真C)では、リニアに平面を延ばして、その内部にどういうワンルームをつくるかと考えました。つまり、まっすぐな空間の中に、何かを挟んで居場所があるというものです。ここでは、居場所そのものがずれて

ずらして見通す

居場所

「原野の回廊」

2006

C
風の輪(2003)
写真



解くべき問題を探しつつ 同時に 視線を思考する

Igarashi Jun

Special Feature

Controlling Lines of Sight Chapter 1

重なっていったらどうなるだろうか、というところからスタートしています。

ずれることで淀みができるので、その淀みに収納とかソファやテレビを置くスペースをつくっていく。ちょっと見えたり、ちょっと見えなかったりという居場所をつくって、それがつながっていくことで、ゆるやかにワンルームが成立するというようなやり方なんです。それぞれの部屋は最小限の単位でつくられています。

天井高は、まず 番手前の箱は客間で、ここは地べたに座ることが多いから、そのプロポーションで考えると最小限で2・2mくらいあればいい。次に玄関は、お客さんを迎え入れる部屋なので多少高めにとる。応接室は趣味の部屋で、大量のレコードを収納するからさらに高くする。リビングは12畳くらいですが、ほかの部屋に比べると大きいので、それに対応したプロポーションにする。ダイニングは、その次のキッチンが2階に寝室をもつので、そのつながりを考えてかなり天井を高くする。そんな流れでつくりました。

また奥にいくほど土地が下がっていたので、基礎をまず打って、根掘り作業をなくしています。道路側のレベルと奥のレベルを階段状につなぐ構成はそこからきていて、床は最小限に10cmずつ下がっていきます。視線の抜けとしては、レベルが下がっていくと、物理的な直線距離よりも当然長く見えるわけです。仕上げの素材は、お施主さんから真っ白は避けたいというリクエストがあったので、それでは、箱ごとにあるような素材を使いましょうということになりました。

—— 箱単位の居場所がはつきり分節されて、平面的にも断面的にもずれているんですね。

五十嵐 そうです。最初のスタディは勝手にずらしていたんですが、工法がツープイフォーなので壁量は最低60cmないと認められません。最終的にその壁量をとるために、短辺方向の面は微調整していきました。

—— ここは、空間のボリュームとしてはどういう感じですか。
五十嵐 床面積としては、延床で40坪もないんです。ただ、僕がなるべく広くと考えるのは、とくにワンルームでは視覚的な距離がとて重要になると思ってきたからです。ここでは、客間から子ども室まで見通せます。トイレと浴室以外は完全にワンルームですね。

house O ハウス・オー

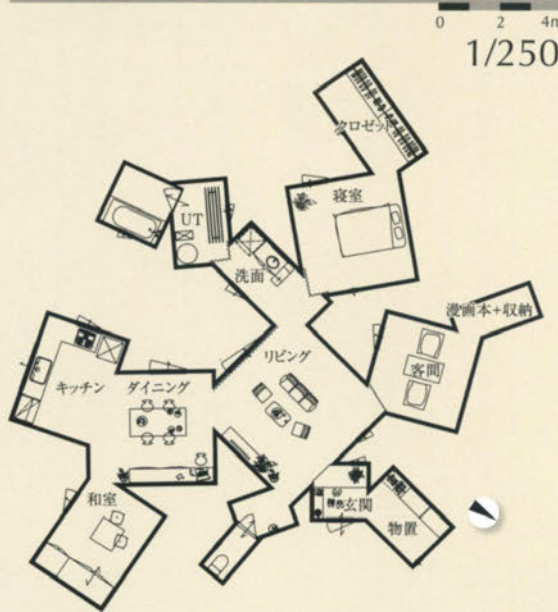


建築概要

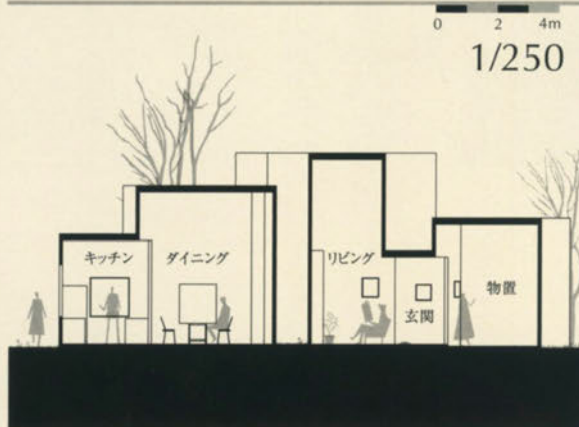
| | |
|-------|------------------|
| 所在地 | 北海道 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦 |
| 設計 | 五十嵐淳/五十嵐淳建築設計 |
| 構造設計 | 長谷川大輔構造計画事務所 |
| 施工 | 五十嵐組 |
| 敷地面積 | 1,483.65㎡ |
| 建築面積 | 112.15㎡ |
| 延床面積 | 112.15㎡ |
| 構造 規模 | 木造 地上1階建て |
| 設計期間 | 2008年4月~11月 |
| 工事期間 | 2008年12月~2009年4月 |

写真上/南西側から見た全景。

平面図



断面図



ダイニング

奥にリビングと客間がのぞく。



キッチン

ダイニングから見たところ。



寝室

クローゼットから寝室を通してリビング方向を見る。家の中心にリビングが位置する。



模型

光をどう取り込むか、光が壁にどう当たって、どう反射するか、については模型でシミュレーションする。写真はダイニングで、右手にリビング、左手にキッチンがつながる。

開口部は大きさや寸法がさまざままで、位置も変えてあります。どんな意図があるのでしょか。

五十嵐 大きな開口部や壁を半透明にして拡散光を得たくても、コスト的に難しいときがあります。その場合、ポツ窓を分散させて開け、光をどう分布させるかを考えます。濃淡をつけて適材適所に、この部屋の用途ならこのくらいの窓が必要で、この位置にすると光がこう入るから、向こうの部屋からはこう反射して見えるだろうとか。それが連なっていくと、どうなるかといったふうに開口部を決定しています。

「house O」は同様な手法ですが、ここまでバリエーションができるのかと思いました。

五十嵐「原野の回廊」を雑誌で見た方が、ああいう形がいいということに依頼をされました。土地も450坪あったんですが、

見えない場所を増やす意味
「house O」 2009

最初にもらった部屋の希望面積を足していくと70坪くらいになつてしまい、予算的に無理だろうと。そこで、こちらが勝手にポリユームをつくっていきました。

まず全体を四角いポリユームに収めると、当然ですが、部屋ごとの日当たりが不平等になります。東向き部屋は、午前中しか直接の日が入らない。それを部屋単位で切り離すと、4面に当たりますよね。ただ、箱と箱を結ぶのに、通路のような箱がもうひとつ必要になるし、平行にずらす限りは、方位に対してあまりメリットがありません。ならば、土地は広いのだから、わがままに箱をつないでいったらどうなるだろうかというスタディをしました。まず道路側には、玄関や収納といったパツプアー的な箱を配置する。そうやって機能ごとに箱を置いていき、最終的には、中心にリビングがあつて、そこからフィンガー状に5方向へ分かれていく案になりました。そうすると、廊下みたいな無駄なものが省けて、4面の採光が得られるので、光の状態もずいぶん変わってきます。

ここでは、面での光の動きが重要だと考えていました。壁がいろんな角度で振れていますから、日がまわるとレフ板のように光を反射していつて、いろんなバリエーションのある光の状態ができる。壁と天井は真っ白なんです、そうした光によってかなり濃淡がついて見えてきます。

—— これは迷路性がありますよね。

五十嵐 ええ、でもじつは非常にシンプルな動線で、リビングが中心なのでどこへ行くにも近いんです。四角の中に納めるようにと合理的なプランだと思います。

また同時に、「原野の回廊」では平行にずらしていったので、見えない場所ができるということも限度があります。それがこのように角度を振つてずらすと、見えない面積がずっと増えて、そういう場所を多くつくつてあげようという意図がありました。実際、直接見えていなくても、気配や光を感じつつ、意識のなかでつながっているという状態がとてもおもしろかった。人間というのは、見えないことで予測をするんだなあ。

—— すごくシンボリックな空間がたくさんあるような気がしますね。

五十嵐 ここは天井を高くしたくて、全部のポリユームを10mからスタディしはじめたんです。ただ、ここもツバイフォーの工法なので、ハイスタッドという一本ものの材料が最大で6m

いがらし じゅん / 1970年
北海道生まれ。90年北海道中央
工学院専門学校卒業。91-95年
BEN建築設計事務所。97年五
十嵐建築設計設立。現在、東
北大学、名古屋工業大学、北海
道工業大学非常勤講師。今回紹
介した以外にも作品『「空
のヴォイド」(2003)、『トラ
ス下の矩形」(03)『白のコートハ
ウス」(05)、『tea house」
(06)、『room/set」(06)、『農
の舎」(08)、『湘南の家」(09)。



Igarashi Jun

五十嵐 淳

Special Feature

Controlling Lines of Sight Chapter 1

なんですね。また座屈を含めた構造的な理由から、最終的には中央のリビングが一番高い6mになりました。ほかはそれより徐々に下がっていくという構成です。

Part 6 原点としての 光、視線

「矩形の森」 2000

—— では最後に、デビュー作ともいえる「矩形の森」のお話をうかがいます。

五十嵐 このときは、ひとつには、家具と空間がうまく融合して、雑多なものがあっても成立するインテリアはできないかと考えました。そしてその居場所を生み出す拠り所となるのは、柱だと思っただけです。柱はもともと邪魔なものですけれど、あざむきぎりの狭さになると無視できない状態になります。そうしたときに、いろんな居場所がなくなっていくワンルームができるのではないかと。ここでは、1800mmグリッドで柱を配しています。また、できるだけ自由な空間にしたかったので、給排水などの動かさない設備は、下水接続に最も近い西側に寄せてしまいました。それ以外のグリッド内は相当自由に動かせます。

ほかに、天井高を2200mmに抑えたのは、水平方向に視線が延びていく空間にしたかったからです。それと、気積を小さくして熱負荷の効率をよくすること、サッシの最大寸法というのもありました。

—— 半透明の壁は、ペアガラスをポリカーボネイトの小波板で挟んでいるのですね。

五十嵐 そうです。こういう拡散光という状態を意識したのは、直射光というのは人間にとって快適ではない光だからです。そのためにカーテンを閉めたりしますが、建築家としては設計の根本的なところで解決したいと思いました。その考え方はかなり一貫しているような気がします。この方法だとトリブルスキになるので、断熱性能もいんです。とくに室内側はガラスとポリカーボネイトとのあいだでコールドドラフトが起きるから、内部は冷気の影響がほとんどありません。

もう5年以上前ですが、塚本由晴(*3)さんが佐呂間に来



写真上右／玄関前の風除室。
写真上左／玄関側から室内
を見通す。1間角グリッド
33個からなる一室空間。

矩形の森 くけいのもり

建築概要

| | |
|-------|---------------|
| 所在地 | 北海道常呂郡 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦 |
| 設計 | 五十嵐淳／五十嵐淳建築設計 |
| 施工 | 五十嵐組 |
| 構造 規模 | 木造 地上1階建て |
| 敷地面積 | 166.93㎡ |
| 建築面積 | 109.30㎡ |
| 延床面積 | 79.49㎡ |
| 設計期間 | 2000年4月～10月 |
| 工事期間 | 2000年11月～12月 |
| 総工費 | 11,500,000円 |



写真上／西側外観。半透明の壁は、ペアガラスをポリカーボネートの小波板で挟んだトリプルスキン。断熱性能と拡散光の取り入れを両立させた。写真下／南東側夜景。

平面図

0 2 4m
1/250



断面図

0 2 4m
1/250



てくれたときに、すごく勇気づけられる言葉をいただきました。君がやっている条件というのは、天秤にたとえると、天秤の向こう側にのせる重りのバリエーションがすごく豊富なんだ。だからそれに釣り合わせるべく、設計のバリエーションも同じく、いろいろと生み出せる可能性がある、と。その天秤の条件は都市でも北海道の地方でも同じことがいえるとは思いますが、思考のレベルで非常にいいきっかけになりました。その言葉は

* 3

塚本由晴
（つかもと よしはる／1965）
建築家。貝島桃代とアトリ
エワン共同主宰。

今でも重要で、さっき「迷いたい」と言ったのは、向こう側の重りを決めると釣り合わせるものも決まってしまうということなんです。与条件をなるべく広く受け入れて、何を解くべきかを探そうというスタンスをとる。視線の問題は、そうした構成を考えつつ、同時に思考しています。建築というのは、目で見て確認すること、それを脳が判断することが大きなウエイトを占めていると考えるからです。



写真右／東側外観。右側の棟が「屋内の家」、左側の棟が「屋外の家」。写真左／北側外観。右手に玄関。中央に開いている木製窓扉が、普通ではない何かを予感させる。

設計 保坂 猛

Special Feature

Controlling Lines of Sight

Chapter 2 Case Study

棟別を生きる



モノクロ写真10点は20ページ以降にカラー写真で紹介。上の5点は「屋内の家」の室内で、夫婦と子ども2人が不自由なく住むことができる部屋や水まわり、家電が入る。

小さな住宅を広く感じさせるための試みはさまざま。できる限り大きなエアボリュームを確保するという手法もある。しかし、保坂猛さんはあえて細かく分ける「分棟」を選択した。そこに生じる多様な「あちらとこちらの関係」。「別の空間がある」という視覚的・心理的なゆとり。ここに狭小をクリアした新しい世界が見える。取材 文／中原 洋 写真／藤塚光政

空間意識を
誘発することで
狭小からの
脱却を図っている



玄関からリビング越しに「屋外の家」を見通す。日常生活に必要な空間とは別に「プラスアルファの空間がある」という心理的なゆとりが、狭小さを感じさせない。

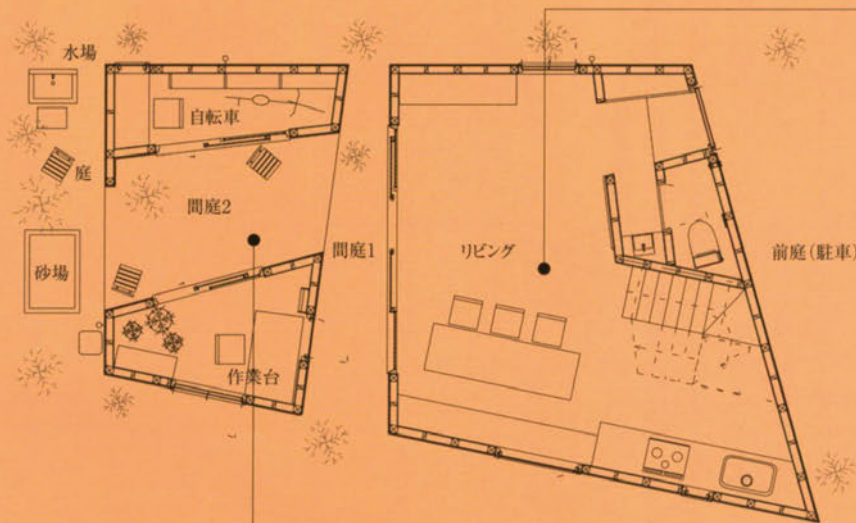
特集／視線の操作 その2

ケーススタディ

狭小に距離

屋内の家+屋外の家

屋内の家



下の5点は「屋外の家」。右の1階平面図からわかるとおり「屋外の家」自体が実質的にふたつの棟に分かれている。建ぺい率40%の敷地なので、可能な建築面積は12坪弱だが、それをあえて3つに分棟したプラン。

屋外の家





作業室



屋上テラス



吹抜け見上げ

屋外の家

下の写真は、南端の庭にある砂場から「屋外の家」と「屋内の家」を見通したところ。前面道路まで視線が通る。



「屋内の家」と「屋外の家」は分離しているが、生活は連続的。たとえばキッチンからパンを持って歩き、屋外に出て食べたり、という暮らしが想定されている。

Special Feature / Controlling Lines of Sight Chapter 2 Case Study

屋内の家

リビング階段側

リビングダイニング

階段からの見下ろし



もうひとつの
あるいはもうふたつの
空間がある家

2階の浴室の窓から「屋外の家」を見る。床レベルもずれた3つの棟が、開口部を介して多様な視線を生み、多様な関係を生み、屋内と屋外が混ざり合う。ちなみに「屋外の家」でのキーワードは、植物、自転車、工作、作業、昆虫飼育、ハンモック、日光浴、土いじり、水あそび、空を眺める、読書など。屋内では汚れるものとして排除されてきた行為も含めて、人間の生活行為を取り戻すことが意図された。

奇をてらった家ではない。白くモルタルで仕上げられた四角なファサードを見せる住宅だ。

が、玄関扉にドアノブが見えない事実、通りに面した中2階の高さにあるガラスの入らない木の窓、開けるか閉めるかだけの窓に気づくなら、この時点でたいていの人はこの家の設計者のただならない意志と意気込みを予感するにちがいない。

敷地の西、隣1軒置いた先に白山神社がある。赤い鳥居に大きな木々。同じく隣家を挟んで南10mほど先には善福寺川緑地公園。都内にこんな公園がまだあるのかと驚くような場所。しかし、ほんのわずかの距離を置いて、その緑を全面的に楽しむわけにはいかない。

もう一度書いておく。この家、奇をてらったものではない。けれども、平面図を見ると尋常なプランでないことも確かだと思う。

狭小の土地に3つの建物がある。土地95・98㎡。建ぺい率40%の制約。調整地域独特のさらなるきびしい制約もあった。北道路へ接する面は2m、東西に70cm、南は1・5m引くことを義務付けられている。すべてはこのなかでの勝負になり、3つの棟(建築面積37・32㎡)が建てられた。

あらためて思う。狭小住宅は狭小であればあるほど設計上の手数、工夫を必要とすると。頭のなかは今までに見

てきたさまざまな狭小住宅のプランが駆けめぐる。狭小住宅は可能な限り広い空間をつくるのが、一般的な解だと思われているのではないだろうか。それはそれでまちがいでないだろう。しかし、そのうえで、この家の場合、ある意味禁じ手ともいえる分割という手法で設計を進めている。「別にもうひとつの空間がある」という空間意識を誘発することで狭小からの脱出を図っている。

イメージのなかのプラス空間

この家、まず作品名になっているとおり、保坂さんの言う「屋内の家」と「屋外の家」という概念のうえに成り立っている。

以前の彼の作品群で語られた「家の内」「家の外」という空間領域の問題意識の延長線上にあるのかもしれない。けれど、明確な別空間の設定は、さらなる複雑系イメージの空間を押し出しているような気がする。

離れ、あるいは茶室なら、なるほどですむ別棟。それをほとんど無目的とも見える場所を設定することで空間に変化を生み、刺激的なものとして生かしている。

言い方を換えるなら、この家は頭のなかに記憶する居住空間を、連続性を

断って配置することでさらなる空間の意識を拡大させている。イメージーションをそそる別棟。機能としてならワンルームで成立するはずの空間に、別の異空間を加えることで脳を刺激すると言っているだろうか。それが2棟あり、同じ床仕上げの間庭でつながって「屋外の家」となっている。

奇妙な発想に見える。図面を見るとけれどこの家の内部に入ってみると素直に「もうひとつの、あるいはもうふたつの空間がある家」と受け取れる。意外な自然さ。

母屋のダイニングテーブルに座って前後左右を眺める。なんの違和感もない。庭先に離れがある。空間の連続性があんなに収まる。だから生まれる広さの感覚、狭さを忘れさせてくれるあちらの部屋、あちらの庭。高度な心理学としての空間創造がここにあるように感じる。重層する空間は、重層する壁よりも今ひとつ力を見せるといって確信か。

視線の貫通

広さを感じさせるこの建築のもうひとつのセオリーは視線の貫通だ。

玄関扉を開くと視線はリビングを抜け、「屋外の家」の間庭を抜けて、その先の隣家の庭先を抜けていく。これが意識的に慎重に操作されている。

階段の踊り場に設けられた大きめの木の窓は、ガラスなしだから視線は通さない。開閉ふたつの役割しか果たさない。しかし、開け放つたときの開放感はずいぶん強い。あらためてガラス窓の意味が問われている気がする。

もうひとつ、くっきりと景色を切り取る窓枠の効果も大きい。

およそ6年前、保坂さんはガラスを木枠に外から張り付けることによって、景色をくっきりと切り取る窓がほしいと望んだという。窓メーカー「キマド」の社長と6時間かけてディテールを描き、やがて製品化された。その窓が全面的に採用され、ここに生きていく。景色が一枚の絵でもあるかのように見えてくる。

窓を操作するこのふたつの手法によって、視線へのこだわりが形になっていると言えはいいだろうか。

「屋外の家」のふたつの部屋のひとつ、最大内法1200mmという2畳程度の書斎(自転車室)のテーブルに座ってみる。左手のサッシを開ければ間庭2の空間が隣室としてそこにある。母屋の家族の雰囲気も直接的に伝わってくる。

狭小をクリアした新しい世界が見える。東孝光さんの「塔の家」(1967)以来の狭小へのさまざまな挑戦の歴史、建築家の試みがあらためて思い起こされてくる。

屋内の家 + 屋外の家

建築概要

| | |
|-------|--------------------|
| 所在地 | 東京都杉並区 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族 | 夫婦+子ども2人 |
| 設計 | 保坂猛 / 保坂猛建築都市設計事務所 |
| 構造 | 坂根構造デザイン |
| 施工 | 栄港建設 |
| 構造 規模 | 木造 地上2階建て |
| 敷地面積 | 95.98㎡ |
| 建築面積 | 37.32㎡ |
| 延床面積 | 71.20㎡ |
| 設計期間 | 2008年9月~2009年2月 |
| 工事期間 | 2009年3月~8月 |

おもな外部仕上げ

| | |
|-----|-------------------------------|
| 屋根 | FRP防水のうえ、トップコート白 |
| 外壁 | モルタル t=15mmのうえ、ペルアートフラットガン仕上げ |
| 開口部 | 木製サッシ |

おもな内部仕上げ(屋内の家)

| | |
|----|----------------------|
| 床 | オーストラリア桧 t=19mm (1F) |
| 壁 | PB t=12.5mmのうえ、AEP白 |
| 天井 | PB t=9.5mmのうえ、AEP白 |



Hosaka Takeshi

保坂猛

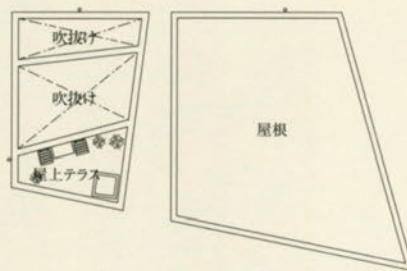
ほさか たけし / 1975年山梨県生まれ。99年横浜国立大学工学部建築学科卒業。99年建築設計SPEED STUDIO共同設立 主宰。2001年横浜国立大学大学院修士課程修了。04年建築設計SPEED STUDIO解散。04年保坂猛建築都市設計事務所設立。現在、国士舘大学非常勤講師。おもな作品 = 「保坂邸」(03)、「LOVE HO USE」(05)、「アクリルの家」(06)、「水戸の住宅」(08)。

平面図

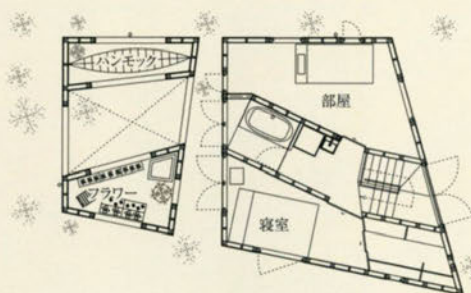
0 2 4m

1/200

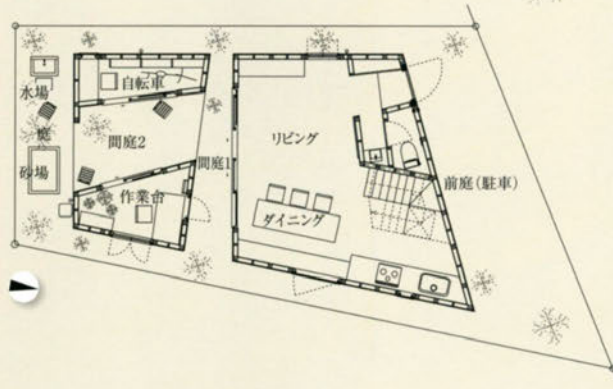
屋上



2階



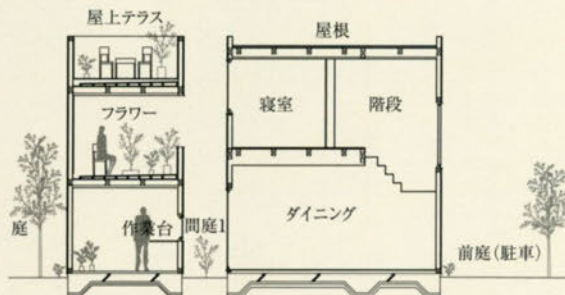
1階



断面図

0 2 4m

1/200



下の写真のように、開口部もさまざまだが、とくに道路に面した木製窓扉の効果は大きい。開け放つと、屋内と周辺環境が瞬時に一体化するような印象。



2階寝室



「屋外の家」の開口部



階段の木製窓扉

名前どおり半透明の素材で四周を覆われた「カタガラスの家」。住宅密集地において視線と光をコントロールする解答例を示しつつ、14のスペースがひとつながりのらせん状に連なる構成によって、部屋と部屋の関係性を見直している。ふたつの試みの相乗効果が新しい空間を提示しているといえるだろうか。

取材 文/伊藤公文 写真/阿野太一



写真下/北西側から見下ろした外観夕景。集合住宅や戸建て住宅が密集した旗竿地に立つ。外壁は四周とも型板ガラス。グリッドとは別の太い影は、RCのスラブと壁の小口。

時計まわりに
空間が上昇しつつ
視線は途切れることなく
斜めに延びる



カタガラスの家



視線は斜めに、立体迷宮



ダイニングからリビングを見る

正面にリビング、右手に階段室。階段室の左上にちらっと見えるのは和室。部屋はそれぞれ床レベルと天井高が異なる。型板ガラスの外壁の室内側は中空ポリカーボネイト板。インテリア素材のような半透明の外壁と、外壁のようなRCで仕切られた室内。部屋をめぐっていると、ときどき内外が反転したように錯覚する。



外観とアプローチ



ミーティングスペース

視聴覚室



「ミュラー邸（*）」。1930年。

ウィーンを拠点に活躍した建築家アドルフ・ロース（Adolf Loos 1870（1933）の最高傑作。

同年代のモダニズム建築のなかでも突出した異彩を放つ住宅。

プラハの傾斜地に立つこの住宅を訪れたことはない。残念なことに、図面と対照しつつ写真を眺め、またはその逆を繰り返すばかり。しかし、そのたびに新しい発見があつて、飽くことがない。汲めども尽きない魅力がつまつた玉手箱のような住宅。

外観は白いキュービクな量塊。平坦な壁面を窓が深くえぐる。厳かで静的、古典的ですからある。ところが内部は、転、めくるめくような立体迷宮が

展開する。広さも天井高も異なる部屋

が隙間なく積み重ねられる。いくつもの床レベルが生まれ、いくつもの階段がそれらをつなぐ。動線と視線は、右に左に、上に下に、激しく振れる。ダイナミックな流動性が全空間を貫く。

「ミュラー邸」の他に類を見ない魅力がそこにある。

部屋の用途に応じて広さや天井高を自在に変え、三次元に積み重ねる。この方法はロースの独創で、「ラウムプラン（Raumplan）」と称された。それまでの住宅ではフロアが明瞭に設定され、部屋の用途と天井高の關係に重きが置かれることはなかった。

それからおよそ80年後の東京都心に「カタガラスの家」が誕生。

この住宅の外観に「ミュラー邸」を思わせる要素はない。だが内部をくまなく見た後に襲ってきたのは、まぎれもなく「ミュラー邸」の内部に入り込んだ想像上の感覚と同じものだった。

スケール感の宙吊り

「カタガラスの家」は密集地に潜むように立っている。歩行者の視点からは全景を眺めることはできない。だがシンプルな立体であることはわかる。

外壁面はベアの型板ガラスのカーテンウォール、その内側に中空ポリカーボネイト板。半透明のその表情はやわらか。室内の像はぼやけ、にじんで広がる。型板ガラスのサッシ割付は内部

構成と関係づけられていない。透明ガラスの窓の位置も同様に見える。スケールを把握する手がかりが失われる。スケール感が宙吊りにされるともいえる。

ピロティの高さは低く抑えられ、ここに面してふたつの引き戸がある。

手前の戸から入ると、意想外の大きな空間がいきなり出現する。天井高は4・2m。階段を上ったところと同じく天井の高い空間。これらは事務所として使われている。外観からは想像しがたい、壮大と形容しても過言でない空間だ。

次に、奥の引き戸に入る。ここが住居部分の入り口。といっても幅80cmの階段室の最下部に入り込んだにすぎない

*ミュラー邸

写真上／白い箱状の外観。写真下／2層分の天井高のあるメインホール。右手上部にはダイニングなどの諸室が立体的に連続する（写真2点＝宮本和義）。



写真右3点／道路側からは建物の全体は見えない。1階アプローチ奥の駐車スペースに面して、仕事場用と住居用のふたつの玄関引き戸があり、仕事場用の引き戸を開けるとミーティングスペース。その右奥に視聴覚室が位置する。

外観からは
想像しがたい空間が
いきなり出現する



作業スペース

正面に仕事場用玄関。入ったところがミーティングスペース。階段を上って作業スペース。そこを左に進むと書庫。書庫から住居部分の階段室に抜けることもできる(29ページ図面参照)。部屋同士の連続感、流動性のとり方がこの建物の特徴づける。それは視線の流動性も意味している。

ミーティングスペースから作業スペースを見上げる

い。真っ白く塗装された内部は上方からの自然光がまわり込み、明るい。確かに狭いが、息苦しさとは無縁。ミコノスの路地に迷い込んだような心地よい外部感覚。

密集地の 圧迫感が消えて

踊り場のないまわり階段を時計まわりに上っていく。途中、書庫、寝室、子ども室の扉を過ぎる。さらに上る。上昇感とともに、ますます明るさが増

す。すると左手にキッチンが広がる。ここで初めて視線が窓から外へと延びていく。キッチンからは階段と同様の時計まわりに空間が上昇しつつ連続的につながっていく。ダイニング、リビング、和室、さらには洗面室、そして屋外の中庭へ。この連の流れはみごとに自然である。この流れ、じつは下方の事務所として使われている部分までつながっている。つまりひとつの直方体の中に階段を介し、必要とされた14のスペースがひとつつながりのらせん状に展開する構成になっているのであ

る。そのつながりのなかで、視線はどこまでも途切れることなく斜めに延びる。パロック建築の特性としていわゆる「視覚の斜方向性」。さらに階段室の開口、外壁の窓、トップライト。これらが視覚を枠取り、多様な変化をもたらしている。

図面からは、やや図式的な操作ではなかったが、それはまったくの杞憂。部屋それぞれの用途への細やかな配慮があり、それが床レベルの微妙な設定に反映されている。型板ガラスとポリカーボネイト板の壁面は、外観以上に

内部において効果的。四周にせまる建物の圧迫感が消されている。キッチンや洗面室など、北向きの場所の不利が解消されている。何より、ふわっとした浮揚感が室内を支配していて快適。プラハの立体迷宮には洞窟のような奥深さがあり、コーナーのそれぞれに闇が宿っている。方、東京の立体迷宮のほうは、開放と閉鎖の適度な中和があり、コーナーは明るさに満ちている。このふたつのラウムプランの住宅は、そのような違いを含みつつ、時空を超えて確かに響き合っている。



階段室

写真上/白く塗られた階段室。踊り場のないまわり階段で、各室へ直接出入りする。正面にリビング、左手はダイニング 右下に寝室。「チラッ」と見える関係が連続する。写真下/左端は窓のように見えるが、和室への出入り口。開口部の見え方が見る方向で変わる。

リビング



カタガラスの家

| | |
|-------------|-------------------|
| 建築概要 | |
| 所在地 | 東京都 |
| 主要用途 | 事務所併用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦+子ども1人 |
| 設計 | 武井誠+鍋島千恵/TNA |
| 構造設計 | 満田衛資構造計画研究所 |
| 施工 | まつもとコーポレーション東京支店 |
| 構造 規模 | 鉄筋コンクリート造 地上3階建て |
| 敷地面積 | 97.75㎡ |
| 建築面積 | 50.38㎡ |
| 延床面積 | 151.14㎡ |
| 設計期間 | 2006年12月~2007年11月 |
| 施工期間 | 2007年12月~2008年8月 |

| | |
|-----------------|--|
| おもな外部仕上げ | |
| 屋根 | 断熱シート防水 |
| 外壁 | ペアガラス(型ガラス t=6mm+ 空気層 t=12mm+ 網入り型ガラス t=6.8mm) |
| 開口部 | アルミサッシ |

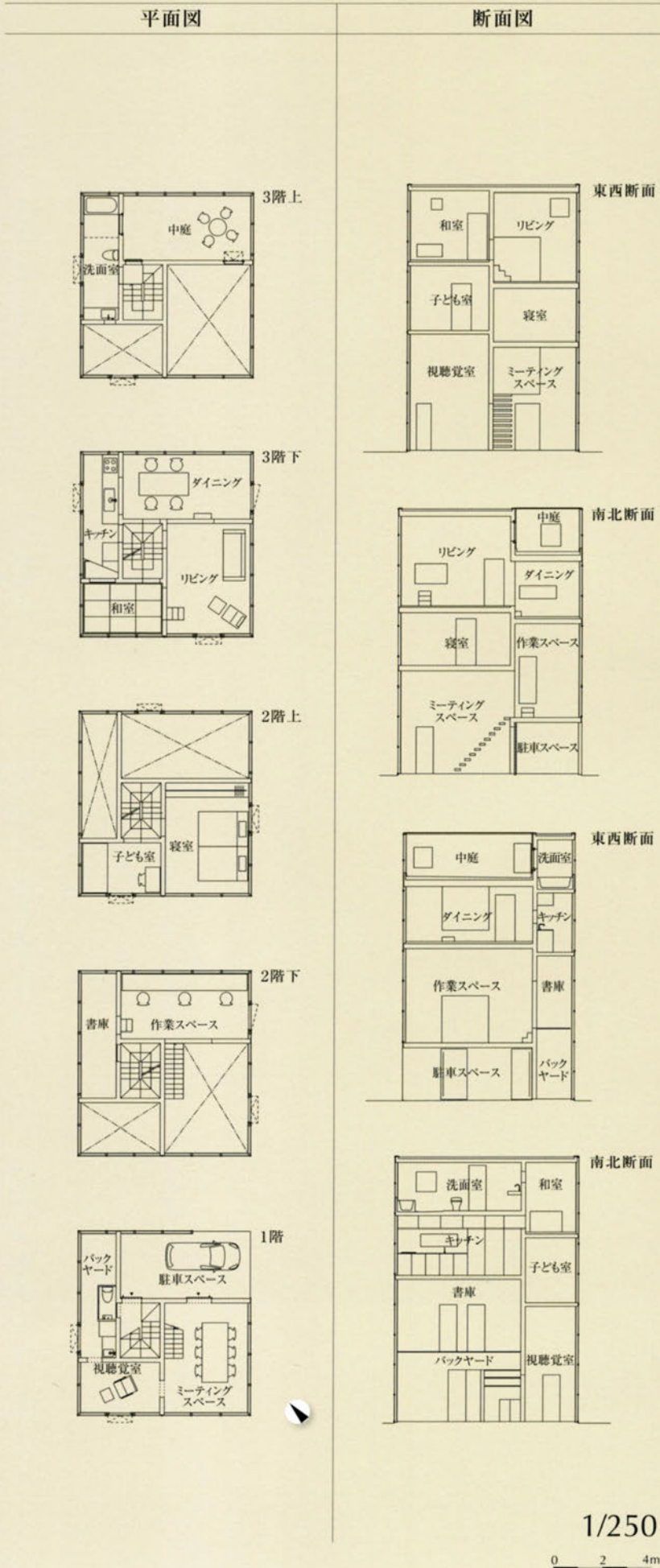
| | |
|-----------------|---------------------------------|
| おもな内部仕上げ | |
| 1階 子ども室 | |
| 床 | コンクリートのうえ、 モルタル金ゴテ仕上げ ウレタン塗装 |
| 壁 | コンクリート打放し、 ポリカーボネイト乳白 t=10mm |
| 天井 | コンクリート打放し |
| 2階 3階 | |
| 床 | オーク無垢フローリング t=12mm |
| 壁 | コンクリート打放し、 ポリカーボネイト乳白 t=10mm |
| 天井 | コンクリート打放し |
| 和室 | |
| 床 | 縁なし畳 t=30mm |
| 壁 | コンクリート打放し、 ポリカーボネイト乳白 t=10mm |
| 天井 | コンクリート打放し |
| 洗面室 浴室 | |
| 床 | FRP防水 |
| 壁 | コンクリート打放し 撥水剤塗布、 一部FRP防水 |
| 天井 | コンクリート打放し 撥水剤塗布 |

武井 誠

たけい まこと/1974年東京都生まれ。97年東海大学工学部建築学科卒業。97~99年東京工業大学大学院塚本由晴研究室研究生+アトリエ ワン。99~2004年手塚建築研究所。05年TNA一級建築士事務所設立、同代表。現在、東海大学 東北大学 武蔵野美術大学 東京理科大学非常勤講師。

鍋島千恵

なべしま ちえ/1975年神奈川県生まれ。98年日本大学生産工学部建築工学科卒業。98~2005年手塚建築研究所。05年TNA一級建築士事務所設立、同代表。現在、法政大学非常勤講師。TNAのおもな作品=「キバリの家」(05)、「カラコンの家」(06)、「輪の家」(06)、「モザイクの家」(07)、「壇の家」(07)、「廊の家」(08)、「方の家」(09)。



写真=堀田貞雄

ゲストルーム、あるいは夫婦の終の住処として計画された小さな平屋が、母屋の庭先にたたずんでいる。浮かぶように置かれた床と、4個の黒い箱に支えられた低い軒の屋根。岸本和彦さんが「人の居場所としての、相対的なプロポーション」と「絶対的なプロポーション」によって決めたという寸法は、さまざまな場所と視線を生み出した。15坪の空間に、閉鎖と開放が同居する。取材 文/豊田正弘 写真/傍島利浩



写真下/北西側外観。母屋(写真の外、左手にある)の庭に立っている。湿気対策で床を浮かせて風の通りを確保しながら、景観にも配慮して全体を低く構えている。

視線は下向きに
そして
黒い箱のあいだから
四方へ抜けていく



RSH:3



閉鎖と開放の視覚



西側の「川ヲ眺メル居場所」から囲炉裏のある「中ノ間」を見る。水まわりや収納の機能をもつ4つの黒い箱が屋根を支える構造。箱のあいだから視線は四方へ抜けていくが、設計者が「いかに閉じるかを模索した」というように、「中ノ間」自体は壁と抜けの比率が6対4と、シェルター的な安心感を覚える空間。

中ノ間



南の角に位置する「紅葉ヲ眺メル居場所」。隅柱を抜いて四隅を開放した効果が生きる。床から1,650mmという高さで水平に全周をめぐる軒天が、視線を絞り込み、水平方向への伸びを誘導している。

紅葉ヲ眺メル居場所

軒と床



玄関から見る



玄関の腰掛けと母屋

右写真4点／玄関にはRCキャンチレバーの腰掛けがある。外周の建具は木製のガラス引き戸で、閉めた状態でも視線の抜けはあまり変わらない。囲炉裏のもつ強すぎる求心性をやわらげるために、箱も方形屋根もあえて偏心させている。



南側を見る

浴室



写真左／地面から床面までの高さは1,130mm。床スラブまではRCで、コストも考慮して土台から上はすべて木造軸組工法とされている。庇のシャープな跳ね出しに見合うだけのシャープな床を描くために、RCスラブを少し手前で止め、根太で跳ね出してリズム感のある影を出したという。建具はすべて箱と一体化した戸袋に納められる。

そこには隅柱もなく
水平に延びた
軒天と床の先から
風景が流れ込んでくる



岐阜駅から車で30分、整然と区画された集落の 番奥にその敷地があった。同時に設計された門構えのずっと先、母屋の外壁からコーナー部分が顔をのぞかせている。近づいてみると緑の小山を背景に、建物はかわいらしく、地面にそっと置かれたようにたたずんでいた。

方形屋根のシャープな軒先と、テーパーをつけたRCスラブから軽快に跳ね出した木床が印象的だ。さっそく外階段を数段上がり、深々とした軒の下、腰掛け付きの玄関から内部に入る。

座ったときの心地よさ

大きな引き戸を開けて中に入った途端、印象は 変する。屹立する大小4つの黒い箱。屋根勾配に沿った天井面と、その先にぐっと低く水平にシナ合板を張った軒。杉板張りの床。そしてそれらのあいだから強烈なコントラストで外部の緑が目飛び込んでくるのだ。視線は下向きに、そして建物の四隅に引き寄せられる。

とくに、床から1650mmという高さで水平に全周をめぐる軒天が、空間を強く支配しているように感じる。立っている、軒天が見え隠れするような微妙な高さ。しかしここにいると、すぐに腰を下ろして座り、コーナーに抜けていく景色を楽しみたくなる。その寸法はどこから導かれているのだろうか。

「人の居場所としての、相対的なプロポーションがある」と岸本和彦さんは言う。ここでは、座ったときの目

線でそれが決められているというのだ。この住宅はゲストルームとして計画が始まり、終の住処を意識したものに変わっていった。そこで考えたのは、シェルターとしての壁をしっかりとつくり、領域を守ることだったという。景色にばかり目が行くのだが、囲炉裏の置かれた中央のスペースについていえば、壁と抜けとの比率は6対4で、「壁勝ち」の空間になっているそうだ。納戸のボックスに納められたフラッシュ戸を引き出し、就寝スペースをつくる。とさらにその感は強まる。

ところが各コーナーへ歩いていくと、その比率は逆転する。おだやかな季節にガラス戸を引き込めば、そこには隅柱もなく、水平に延びた軒天と床の先からモミジなど自然の風景が流れ込んでくる。

4つの箱を配置したワンルームという、きわめてシンプルな平面。しかし、どうも知らぬうちに自分好みの居場所を探しているようで、先ほどからウロウロと歩きまわっている。

ちよつと小さく

さて、外部を案内してもらおう。

地面から床面までは1130mm。山とのあいだを流れる小川からの湿気対策で建物を浮かし、同時に建物は低くしたい。「絶対的なプロポジション」と与条件とを整合させるべく、寸法調整を繰り返して床高と内法高さを決める。そこではおよそ5cm単位で上下させて



俯瞰外観

写真左上/樹木で見えないが、建物の南側下方には、写真右手から奥へと小川が流れている。ちなみに作品名の「RSH」は「River Side House」の略で、岸本さんは偶然にもシリーズ化するほど川のそばの建物が多く、現在は「RSH:5」まで竣工している。写真右下/トイレ。天上は屋根の勾配がそのまま現れている。



鴨居のディテール

写真右上/全面引き込み可能な建具の鴨居は、ロールカーテンボックスと一体化することで、将来の屋根のクリープに対する建具の微調整にも意匠的な違和感が生じないように考えられている。全体の構造はもちろん、鴨居の詳細も構道家との共同作業で、数値化したクリープ予測をもとに決定された。



トイレ

日暮れどき、黒い板壁に背をもたれてお茶をご馳走になっていると、気分がほぐれていく。これはきつと、ゲストハウスとして正解なのだ。囲炉裏のまわりでの宴がたけなわとなる頃、この小さな空間を夜のとばりがやさしく包んでくれるにちがいない。

こちらには外国人のお客さまも多く、彼らはみな、この空間に「日本的」なものを感じて興味を抱くと聞いた。そうした感想は、天井の構成も含めたそのスケール感に抱かれているのだろう。畳はなく、柱梁を現しにせず、囲炉裏のもつ強い求心性を避けるため方形屋根の頂部も偏心している。じつは訪問する前、この偏心が空間のバランスを崩しているのではないかと思っていたのだが、杞憂だったようだ。一般にいう和風とはだいぶ趣の異なる住宅だが、なるほど「和」を感じる。

再び室内に戻ると、妙なことに気づいた。この空間がどのくらいの広さをもつのか、まったく意識していなかったのだ。実際には15坪という極小の空間なのだが、窮屈さは感じない。岸本さんは「ちよつとずつ小さくつくること」を考えているそうだ。そう言われてみると、室内のスケールはわずかずつ小さいようなのだが、身体にフィットした空間はむしろ心地よい。

RSH:3

建築概要

| | |
|--------|-------------------|
| 所在地 | 岐阜県山県市 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦 |
| 設計 | 岸本和彦/aca |
| 構造設計 | THR構造設計室 |
| プロデューズ | アーキテクト スタジオ ジャパン |
| 施工 | 建築工房ビス(ASJ岐阜スタジオ) |
| 構造 規模 | 木造一部鉄筋コンクリート造 |
| | 地上1階建て |
| 敷地面積 | 490.78㎡ |
| 建築面積 | 56.74㎡ |
| 延床面積 | 56.74㎡ |
| 設計期間 | 2005年3月~8月 |
| 工事期間 | 2005年9月~2006年4月 |

おもな外部仕上げ

| | |
|----|-------------|
| 屋根 | ガルバリウム鋼板平葺き |
| 外壁 | 杉板 t=12mmOF |
| 建具 | 木製建具(米ヒバOF) |

おもな内部仕上げ

| | | |
|-----|---------------------------|----------|
| 中ノ間 | 紅葉ヲ眺メル居場所 | 川ヲ眺メル居場所 |
| 床 | 杉板 t=30mmOF | |
| 壁 | 杉板 t=12mmOF | |
| 天井 | 合板 t=6mm+シナ合板 t=4mm | |
| 納戸 | 台所・トイレ | |
| 床 | シナ合板 t=9mmOF | |
| 壁 | シナ合板 t=9mmOF | |
| 天井 | 合板 t=6mm+シナ合板 t=4mm | |
| 浴室 | | |
| 床 | ヒバスノコ | |
| 壁 | ヒバ t=9mm | |
| 天井 | 珪酸カルシウム板 t=9mm +ウレタン塗装 | |

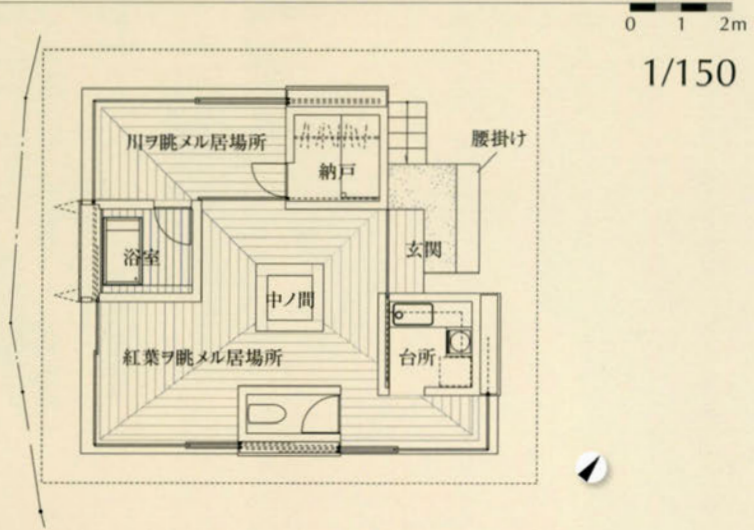


Kishimoto Kazuhiko

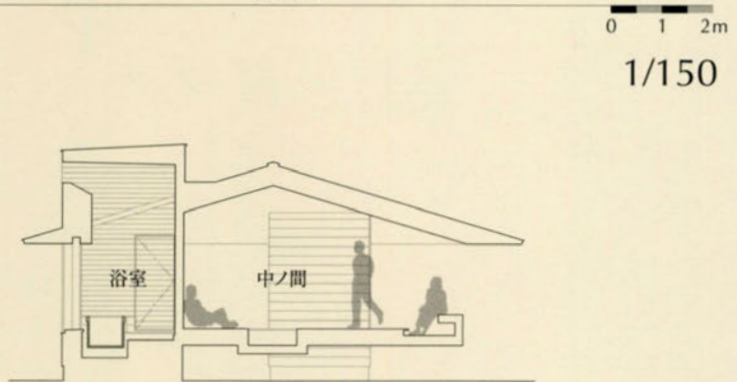
きしもと かずひこ/1968年鳥取県生まれ。91年東海大学工学部建築学科卒業。エーアンドエー建築計画研究所を経て 98年アトリエチンク建築研究所設立。2007年acaに組織改名。現在、東海大学 東京デザイナー学院非常勤講師。おもな作品=「soranokatachi」(02)、「chanoma house」(04)、「RSH2」(05)、「鈴木荘」(05)、「RSH4」(06)、「湯河原の家」(06)、「TOKICHIRO」(06)、「葉山の家」(08)、「北鎌倉の家」(08)、「富士見町の家」(09)、「長良川の家」(09)。

岸本和彦

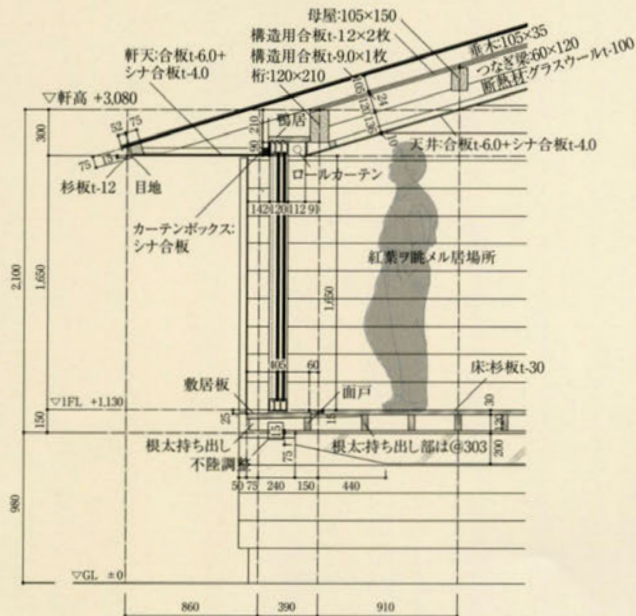
平面図



断面図



断面詳細図



コンクリートのL字型の壁を10個、敷地いっぱいにはりばめて、そこに屋根をかけた平屋の住宅。決して平行にならない壁によって、視線はその隙間を縫って、あるいは壁に斜めに当たってそれ、さらに先へと進み、遮られることがない。と同時に、夫婦ふたりの日常の住まいとして、すみずみまで気配を交わすことのできる親密な空間を生んでいる。取材・文/伊藤公文 写真提供/STUDIO 2A 撮影/Jin Hosoya(建築)、横山新一(ポートレート)



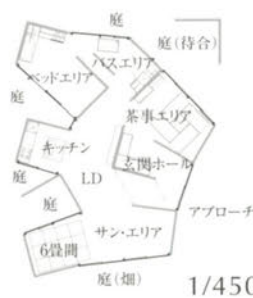
壁はよどみなく視線を流す



写真上／西側外観。屋根は陸屋根で、仕上げは耐水合板にFRP防水。L字壁は内外ともに同一の漆喰仕上げ。写真下／東側外観。



house I



L字型の壁は内外のあちこちに不定形のアルコーブと小さな路地を生む

全面写真／キッチンから見た室内。L字型のRC壁がランダム（実際はおおまかなルールに基づいているが）に配置されて、さまざまな領域がつけられている。



外部に飛び出すL字壁



バスエリア側からの見通し

玄関から見る



ちりばめられた 10個のL字壁

本の柱がそうであるように、一枚の壁もいろいろな働きをなす。たとえば次のように。

壁は、人の動きを遮り、視線を断つ。
壁は、こちら側とあちら側をへだてる。

壁がこのような働きをなすことに疑問をもつ人はいない。近代以降の建築において、壁は限らない存在の重さという桎梏から脱したにもかかわらず、依然としてこうした働きに重きが置かれてきた。だが、方で、壁は別の働きもする。

壁は、風や音を遮り、安全な場を提供する。

壁は、人を寄せ、人が安心して拠る場を生む。

そもそも壁とは、分断し、拒絶する存在よりも、このような親和性に富んだ存在としての働きが求められたのではないか。

「house I」は、こうした壁の親和性を強く想起させる住宅である。

一枚のコンクリートの壁。長さ2・

7m、高さ3・06m、厚さ150mm。

それがもう一枚の同形の壁と直角につながり、自立するL字型のユニットが構成される。L字はちょうど四畳半を内包する寸法で、巨大ではないが、かといって家具的でもない、適度な建築的スケールをもっている。

このL字型ユニットが10個、平面上にちりばめられる。まったくランダムというわけではない。ある規則に縛られている。だがそれは壁が遠く離散してしまわないようにするためのゆるい規則にすぎないので、見、I字型ユニット相互になんらかの規則的な関係性を認めることは困難である。

散逸的。気まま。バラバラ。あつちこつち。

10個のユニットが群れる状態を形容するとすれば、こう言うしかない。

Special Feature / Controlling Lines of Sight Chapter 5 Case Study

このうちの9個の外周をガラス壁面でつないでいく。外周の内側の部分に平らな屋根をかけ、2カ所に天窗をあける。「house I」が出来上がる。単純にして明快な構成。

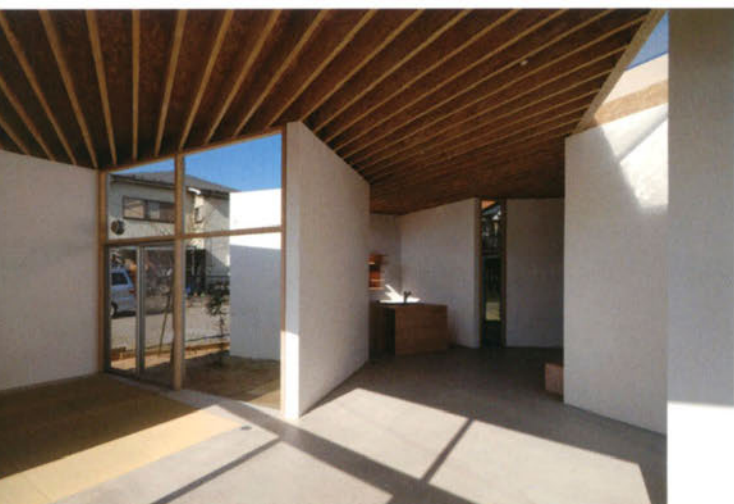
内外同一の漆喰仕上げとするための素材の選択、さまざまに異なる角度の吸収が必要な窓枠まわりの工夫、壁面にスイッチ類を付けず家具に付ける配慮、すべての壁と方向を異にして細かなピッチで架け渡されたポプラ材L・Sの梁、大きな陸屋根の塗膜防水材の選択や軒先の納まり。

すべての工夫は、L字型ユニットの純粋性を保持し、全体構成の単純性を強化するために行われている。その迷いのなさが潔い。

視線と気配が 届く生活

ところで「house I」は夫婦の日常の住まいである。住まわれない状態の写真(今回掲載写真)から

サン・エリアから見る



このページの写真4点/L字壁は長さ2.7m、高さ3.06mで厚さ150mmの壁をL字にユニット化したもの。10個のうち9個で室内をつくっているが、写真上のように、半分外部に飛び出させて内外の一体感を強めているユニットもある。外周はガラス壁面でつながれていて、通常の窓はひとつもない。窓を介して外部とつながることとは大きく異なる感覚。

内外を曖昧に
分節しあいながら
周囲に開いていくことで
生まれる風景



床と天井

コンクリートの床には床暖房用の発熱ユニットが埋め込まれている。写真正面は茶事エリア。天井は構造材現して、ポプラ材L S Lの梁(38mm×235mm材)をどの壁とも平行にならないようにかけて、L字壁が概念的にも構造的にも自立していることを示している。



サン・エリア側からの風景

リビングダイニングからの風景



このページの写真2点はパノラマ写真。ゆがみはともかく、見え方は現地での体感に近い。少し移動するだけで、広がり、奥行き、明るさ、開放感などが変化し、風景が変わっていく。

視界のなかに
多様なパースペクティブを
つくり出し、ゆるゆると
つながり、へだてられる

判断する限り、住まいとして本当に機能するのかが、不安がよぎる。バラバラな壁の向きが落ち着きを奪うのではないか。定まらぬ視線の方向が不安感を増幅するのではないか。

訪れてみると、まったく逆であった。決して平行にならない壁は、内外のあちこちに不定形の小さなアルコーブ、小さな路地を生み、空間はよどみなく流れて停滞することがない。視線は壁の隙間を縫って、あるいは壁に斜めにあたってそれ、さらに先へと進み、遮られることがない。気配も同様、どの場所においても気配が室内のすみずみまで届く。

ここでL字型の壁ユニットは遮断という働きから遠く離れ、壁が包むコーナーのそれぞれに、生活の営みの断片をおだやかに受け入れようとしている。ユニット相互の関係によって、受け入れ方の濃度は異なり、その濃度の分布が空間を染めている。

加えて現実の住み心地を高めているのが、内外の植物群である。屋外には小さな葉の形と細い幹をもったさまざまな樹木や野菜類が植えられ、屋内には葉肉の厚い、あるいは羊歯のような多種の植栽が配され、住まいとしての環境に潤いを与え、細やかな表情の変化をもたらしている。

こうして「house I」は、幾何学の遊戯に陥ることなく、日常の住まいとしての快適さを保証し、実現している。

house I



RCのL字型ユニットが打設された状態。コンクリート躯体の隙間に、人が場所を発見して住みつくイメージがあったという。

建築概要

| | |
|-------|------------------------|
| 所在地 | 神奈川県中郡大磯町 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦 |
| 設計 | 宮晶子 / STUDIO 2A |
| 設計協力 | 本間義章、坂田顕陽 |
| 構造設計 | Structured Environment |
| 施工 | 横溝工務店 |
| 構造 規模 | 鉄筋コンクリート造+ |
| | 木造(屋根) 地上1階建て |
| 敷地面積 | 231.42㎡ |
| 建築面積 | 108.41㎡ |
| 延床面積 | 108.41㎡ |
| 設計期間 | 2006年1月~2007年6月 |
| 工事期間 | 2008年1月~2009年1月 |

おもな外部仕上げ

| | |
|-----|--|
| 屋根 | FRP防水 |
| 外壁 | 炭酸カルシウム発泡体 t=20mm、 樹脂モルタル t=5mm、 スイス漆喰 t=3mm、光触媒塗布 |
| 開口部 | アルミサッシ、スチールフレーム |
| 外構 | 既存土、ジュートクロス、砂利敷 |

おもな内部仕上げ

| | |
|-------|-----------------------------------|
| キッチン | |
| 床 | コンクリート金ゴテ押え、シーラー塗布 |
| 壁 | スイス漆喰 t=2mm、 ワックス塗布(コンロ前のみ) |
| 天井 | 構造材現し(LSL+OSB) |
| バスエリア | |
| 床 | コンクリート金ゴテ押え、シーラー塗布、 一部ヒバ製スノコ敷き |
| 壁 | スイス漆喰 t=2mm、ワックス塗布 |
| 天井 | 構造材現し(LSL+OSB)、 オスモ防水仕様 |
| 共通仕様 | |
| 床 | コンクリート金ゴテ押え、シーラー塗布 |
| 壁 | スイス漆喰 t=2mm |
| 天井 | 構造材現し(LSL+OSB) |



Miya Akiko

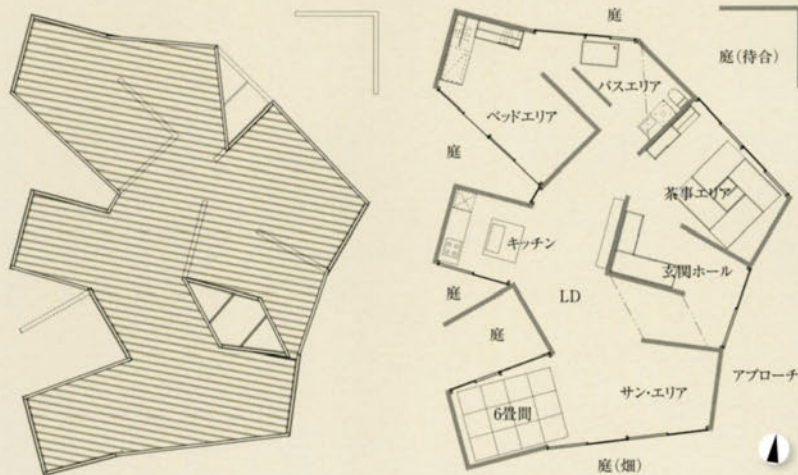
みや あきこ / 兵庫県生まれ。1986年日本女子大学住居学科卒業。86~91年レーモンド設計事務所。91~97年アルテック建築研究所。97年STUDIO 2A設立。現在、横浜国立大学 東海大学 日本女子大学 非常勤講師。おもな作品=「那須の山荘」(98)、「kogota seminar house」(2004)、「house K」(08)。

宮晶子

天井伏図・平面図

0 2 4m

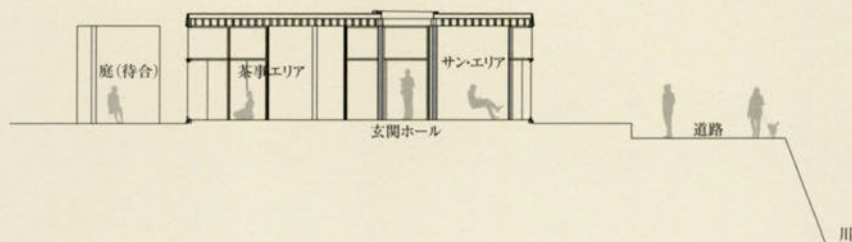
1/250



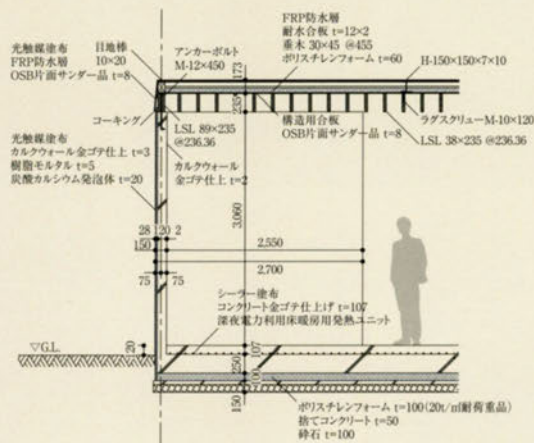
断面図

0 2 4m

1/250



断面詳細図



0 1 2m

1/100

賃貸集合住宅の1室。床面積10坪前後のワンルーム空間のプランは、さまざまな試みがなされている。そこで大きなテーマのひとつとなるのは、空間の広がりやをどう獲得するか、ということだろうか。小川広次さんは、「自分の専有面積が広さとしてつねに認識できるようなワンルームを目指した」と言う。もちろん、ただガランドウにするわけではない。そこにあるのは、視線と心理を読んだ仕掛け。

取材 文/加藤 純 写真/川辺明伸

右手奥の玄関扉は乳白ガラスで、左奥の開口部と同じイメージ。コンクリート壁の入隅部分4カ所すべてに設けられた、床から天井までの縦長の開口部により、視線が抜けて箱の閉塞感が薄れている。玄関側と居室側の床は、約60cmのレベル差がある。この差も視覚に働きかけ、より広く感じられる。

道路側から見る

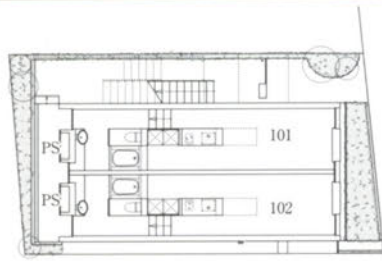


道路側開口部

写真右2点/今回撮影したのは1階の101号室。幅27m×奥行き108m×高さ27mという約9坪のチューブ状の空間。1階居住スペース床面は前面道路から約60cm下げられている。ちなみに、壁は内外ともRC打放し仕上げだが、断熱材を挟み込んだ小川さんオリジナルの新工法が採用されている。



人は見えないところを
確かめようと意識し
空間に動きと奥行きが
生まれる



1/300

国領アパートメント

キッチンから見る



9坪に仕掛けた視線と動き



玄関を開けると壁伝いに道路まで視線が延びる一方で、あえて視線を遮る箱状のコアユニットが中央に配置されている。目の前の扉はトイレで、奥は収納と排気設備など。この視線の遮断が見えないところを確かめようと、人の動きを誘発するという。右手は間仕切りのないオープンな浴室（前後にロールスクリーンが用意されている）。浴槽を床に埋め込み、オーバーフローした湯水は、かぶせた木部との隙間から四方に流れ落ちて排水される仕組み。「美しい水面を楽しんでほしい」というのが小川さんの意図。

玄関から見る

幹線道路から1本入った、東京・調布の住宅街。木枠コンクリートで表情のつけられた壁と、縦長の木製サッシによるファサードが印象的な賃貸集合住宅がある。3階建てのポリュームには、1、2階に約9坪のワンルームが2住戸ずつ、3階には2部屋をもつ1住戸が納められている。

共用のエントランスを通って裏手にまわり、1階の101住戸へ。室内は玄関からまっすぐに打放しの壁が延びるトンネル状の空間で、外からの光が入る奥へといざなわれる。通路の階段を4段下りて進むと、居住スペース。奥から玄関方向を見返すと、通路片側の板張りの壁は細長い空間の中央に配された箱の一部であることがわかる。

隅を消した隙間

いわゆるワンルームの賃貸住宅では、玄関側が細かく区切られた水まわりで占められ、残ったメインの居室は全体面積の半分ほどになっていることが多い。これに対して小川広次さんは「入居者には、自分の専有面積を100%感じさせたかった」と語る。本当のワンルーム空間を残したのである。

空間全体を感じさせるためのひとつの仕掛けが、コンクリート壁の入隅部分4カ所すべてに設けられた、床から天井までの縦長の窓である。居室側の東面に設けられたふたつの窓からは午前中の光が筋のように入り、共用通路側の西面のふたつの窓（ひとつはガラスの玄関扉）からは午後の光が乳白ガラスを通して拡散して入ってくる。十分な光が壁をなめるように伝わってくる

ことで、細長い空間全体が見えやすくなる。また「床から天井までの縦長窓とすると、窓は壁にあく孔ではなく、隙間として見えてくる」と小川さんは説明する。確かに、コンクリートの空間に囲われる閉塞感は薄れ、視線は左右の窓を通して上下にスッと抜けていく。さらに天井と壁との取り合いでは天井側に目地をとり、窓の上端にくぼみがあるため、その先があるかのような上昇感がある。

こうした繊細な納まりは、視線がどのように心理に影響するかを意識してつくられたものであった。なお、前面道路からも居住スペースの床レベルは約60cm下がっているの、道行く人と視線が合うことはない。

奥行きを生む箱

ただし、すみずみまで一気に見渡せると、空間を小さく感じてしまう。そのため、小川さんは空間の真ん中に視線を遮る箱を配置した。引き出し式のカウンターテーブル、その下に仕込まれているキッチンカウンター、そしてトイレや収納、排気設備などで構成されるコアユニットである。

この規模のワンルーム住戸でコアをアイランドのように壁から離して置くことは、スペースの有効活用の観点からめったにない。しかしここでは両側のコンクリート壁に面しては、通路と、棚などを置くことのできるスペースを確保し、あえてコアを真ん中に置いた。コアの壁面が視界に入ること、空間の隅が全部見えることは少ない。すると人は見えないところを確かめようと

Special Feature / Controlling Lines of Sight Chapter 6 Case Study



キッチンとテーブル

キッチンから見た浴室

トイレ

写真右と中／トイレの両脇は半透明のガラスで、外側から見ると行灯状の照明のようにもなる。写真左／テーブルはキッチン側に引き込むことが可能（水栓はためる）。

意識し、空間に動きと奥行きが生まれるというのである。

この空間全体は、芯々で間口が2・7m、長手方向には10・8mある。床面積29・17㎡。そして、居住スペースでの天井高は2・7m。1辺2・7mのキューブが4つ、細長く並ぶ格好である。

そのうちのひとつが、玄関側で60cmの段差がつけられたスペース。この段差を利用して床下に設備配管などを納め、浴室・洗面室・トイレのユーティリティスペースを配している。コアを挟んで玄関スペースと反対側には、床面に水が張られたスペースが見える。最初このスペースを遠くから見ていたときには、居室スペースとのあいだにはガラス板があるものと感じられた。しかし近づいてみると、そこに仕切りは何もない。浴槽が埋め込まれた個所の両側はオープンで、シャワーを浴びるときなど必要ときには天井面に設置されたロールスクリーンを下げて水跳ねを防止する。浴槽からオーバーフローする湯水は、四方から流れ落ちて排水される仕組みとなっている。「縁なしの美しい水面をつくり、極小の空間の中で快適さを追求した」と語る小川さん。開放感の高い浴槽に浸かると、全体の空間を感じながら入浴できる。

視線が自由に行き交うワンルーム空間の中で、真ん中に設置されたコアユニットのポリュームと、床の60cmの段差は目に見えない結果をつくり出す。性格の異なるスペース同士をゆるやかに分ける、自由度の高い空間が視線の操作により生まれていた。

国領アパートメント

建築概要

| | |
|----------|---|
| 所在地 | 東京都調布市 |
| 主要用途 | 共同住宅 |
| 設計 | 小川広次 / 小川広次建築設計事務所 |
| 構造設計 | 構造計画プラス ワン |
| 設備設計 | 森村設計 |
| 施工 | 創建(建築)、中村興業(給排水衛生空調換気)、日栄電機工業(電気)、安藤(ガス)、児玉(型枠)、成澤工業(鉄筋) モリケイ商会(防水)、レオナアート(RC補修)、J、フロント建築(家具)、太平製作所(家具)、山一商店(単板)、泰工芸(金属)、工藤塗装(塗装)、フッコー(サッシ)、Goto Tomorrow (ガラス)、グラスキューブ(ガラス)、時任工業所(左官)、パーフェクトウォッシュ(土間研磨)、富沢造園(植栽) |
| 構造 規模 | 鉄筋コンクリート造 地上3階建て |
| 敷地面積 | 118.10㎡ |
| 建築面積 | 70.64㎡ |
| 延床面積 | 174.93㎡ |
| 住戸面積 | 29.17㎡(4戸)、41.72㎡(1戸) |
| 設計期間 | 2006年1月~10月 |
| 工事期間 | 2006年11月~2009年8月 |
| おもな外部仕上げ | |
| 屋根 | コンクリート防水 コンクリートスラブのうえ、 断熱材 t=40mm 押えコンクリート |
| 外壁 | コンクリート打放し(目地型枠) 断熱材パネル t=25.5mm 打込み |
| 開口部 | 木製サッシ(Low-E、複層ガラス) |
| おもな内部仕上げ | |
| 床 | ナラフローリング t=15mm |
| 壁 | コンクリート打放し(目地型枠) |
| 天井 | コンクリート打放しのうえ、AEP塗装 |



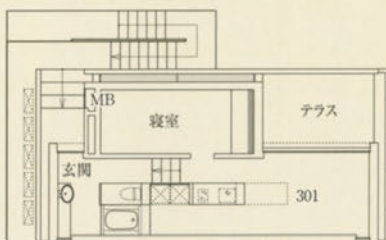
四隅を開放した
空間の真ん中に
視線を遮る箱を配置

平面図

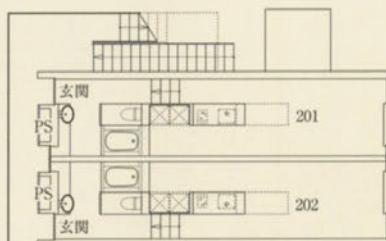
0 2 4m

1/250

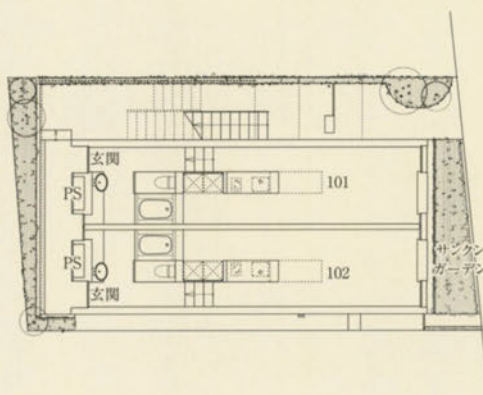
3階



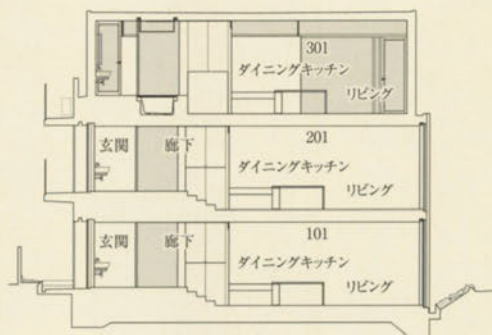
2階



1階



断面図



1/250

0 2 4m



Ogawa Koji

小川広次

おがわ こうじ / 1960年東京都生まれ。82年日本大学理工学部建築学科卒業。82~83年計画設計工房、83~92年谷口建築設計研究所、89~91年小川建築設計事務所、91年小川広次建築設計事務所設立。現在、日本大学理工学部建築学科 法政大学工学部建築学科 東京理科大学工学部建築学科非常勤講師。おもな作品 = 「清水庵」(96)、「田中邸」(2000)、「深大寺の三世帯住居」(02)、「亀有の家」(04)、「阿佐谷南の家」(04)。

ザッハトルテというチョコレートケーキが有名なホテル。ウィーン市街地中心のケルトナー通り面に面し、国立オペラ劇場のすぐ後ろという絶好の立地。

予約がうまく通っていないのか、レセプションのお姉さんが部屋まで案内してくれて「アップグレードしました。料金はそのまま」とおっしゃる。ワオ、ラッキー！

でもこの「トスカ・スイート」は中庭にだけ面している。だから人気のないスイートとしてあいていたともいえるではないか。それに、最近すっかりハード・リニューアルした部屋もあるようだがここはそうではない。

「しかし鯛は鯛だ」とぶつぶつ言いながら実測開始。ベッドルーム、パーラー、バスルーム、ウオークインクロゼットと4室もあり、さすがに広い。ベッドはハリウッド配置だが、通常より長くて2150mm。テレジア・イエロー（*1）のドレープカーテンをベッドスプレッドとアレンジしている。カーベットも黄色でドットが入っている。照明はウィーン風にシャンデリアが部屋の中央に。パーラーのテーブルにはザッハトルテの小さなものとフルーツ4種がきれいに並んでウエルカム。

バスルームはダブルベイスン。独立したシャワーブースがあり、ビデも付いているから6in1。金物やタオルはたくさんあってパーフェクト。全体にまっ白。ツルピカのミニマリズムとはずいぶん違うが、こんな王宮風のほうがスイートらしいという人が多いだろう。

1階のレセプション・カウンターのゲストスペースが恐ろしく狭くて後ろを通れないほど。古いホテルにはこういうものを見かけるが、お金やサインを他人から見られるということがな



ザッハトルテをいただいたカフェ。赤の内装。

くていい。広いロビーで、長く大きなフロントレセプションのカウンター前に並ぶのは「処理されている」という感じで気分がいいものではないからだ。コンシエルジュのデスクでは椅子を勧められてひっそり用件を話すほうがいいし、マップを広げて道をたずねるのはベルカウンターでいい。フロントレセプションやキャッシャーは狭くてもいいのだ。

いったい1級のホテルとはなんだろうか。ファイブスターといってもその都市やチェーンで勝手に名乗っているだけである。国際基準などない。シックススターとかファイブフラワーといふところだ。その評価はハード以外が半分以上を占めるのではないか。かゆいところに手が届くサービスは誰でも気持ちいいのだし、そのうえ優雅で品があつて、ちよつと秘密めいて……どうみても広さや高価な仕上げばかりではない。ましてや狭義のデザインでもない。客がつくる……そう思いませんか？

ところでお菓子のザッハトルテ。それを目当ての客も多いのだが、このホテルの1階、ショップが付いたバーやダイニングルームより、私はカフェでいただくほうが好きだ。静かで落ち着く。甘く、重く、素朴なもので、ホイップした生クリームとともに。

このトルテ、あのデメル（*2）と本家争いがあつたらしい。こうなると恐ろしいことに両方いただかなくてはいけないではないか！

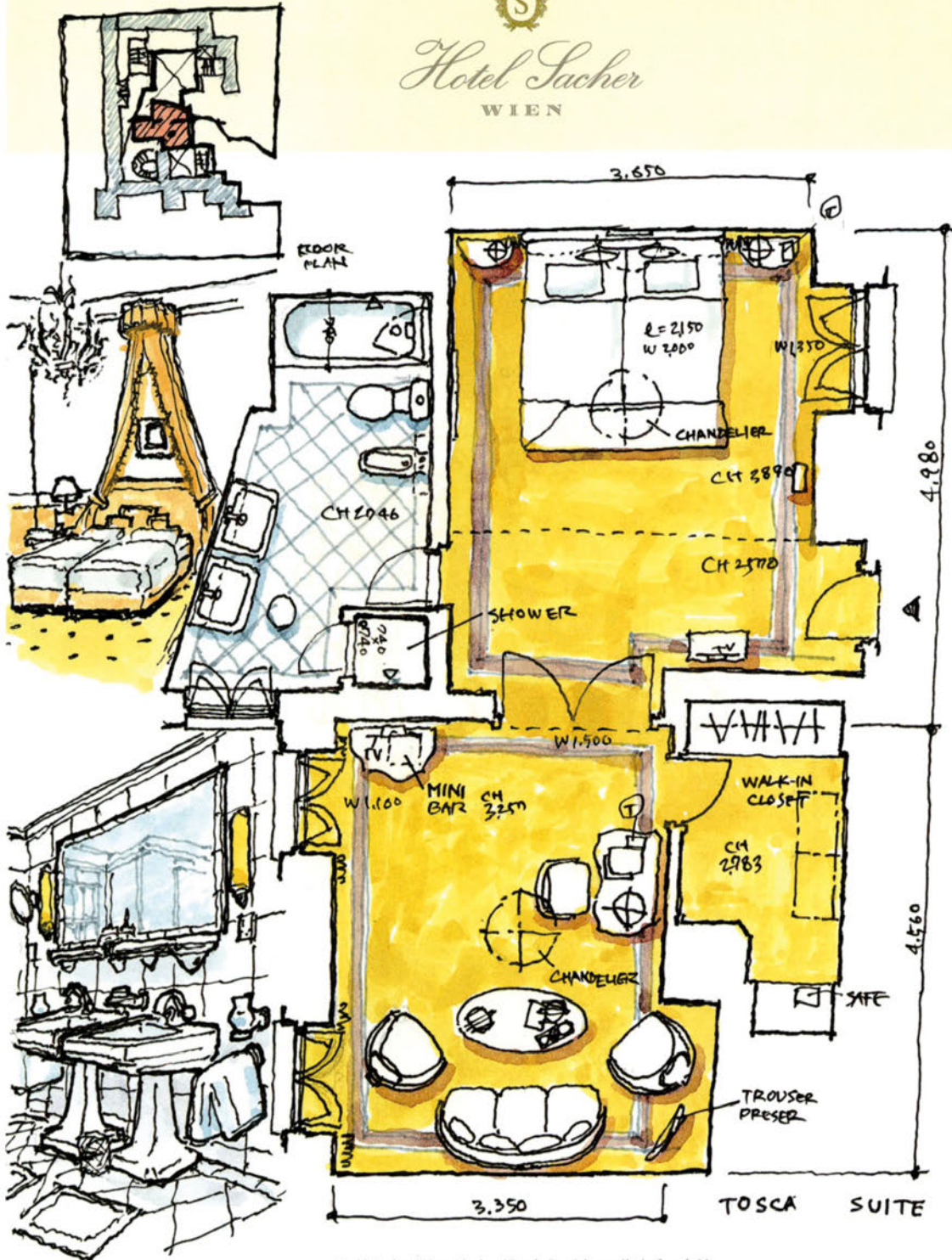
*1/18世紀のオーストリアの王妃で女帝、そのマリア テレジアが好んだとされる黄色いシエーンプルン宮殿外壁に使われている。
*2/Demerl:創業200年を越すウィーンの菓子店。王宮ご用達。

2 モジュールの スイートは 中庭に面していた

うら・かずや/建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京芸術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99年日建スペースデザイン代表取締役。おもな作品=「ロテルド ロテル」(88)、「ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル」(91)、「飯綱山荘」(91)、「ホテルモリノ新百合丘」(97)、「メディアージュ」(2000)。著書に「旅はゲストルーム」(東京書籍 光文社)がある。



Hotel Sacher
WIEN



テレビアン イエローをおもな色とした2モジュールスイート。天井がとても高い。

Hotel Sacher Wien · Sacher Hotels Betriebsgesellschaft m.b.H.

Philharmonikerstraße 4 · A-1010 Wien · Telefon: +43/1/51 456-0 · Fax: +43/1/51 456-810 · E-Mail: wien@sacher.com Internet: www.sacher.com
Bankverbindung: Erste Bank AG Kto. Nr. 010-17888 BLZ 20111 IBAN: AT 972011100001017888
BIC/SWIFT: GIBAATWW DVR: 0181439 · FN 138 917s · Gerichtsstand Wien UID/ATU 39635908

The Leading Hotels of the World



Hotel Sacher Wien

Add/Philharmonikerstrasse 4.A-1010 Wien, Austria

Tel/+43 1 51 456-0

Fax/+43 1 51 456-810

E-mail/wien@sacher.com

URL/www.sacher.com

Room Charges/ Superior room€295, Deluxe room€420~520

Junior suite€700, Executive suite€1,180, 1 bed suite€1,660

2 bed suite€2,180, Presidential suite€4,380

1€ = 130.45円 (2009年12月22日現在)

井戸底

の

光

HOT-SE-ST-WA



「諏訪のハウス」設計／西沢大良

1/八ヶ岳の高原に、林を背にして立つ。家らしく見せるため、家形¹にしたというが、屋根の軒の出がないので、普通の人は、宇宙科学か何かの実験施設のように見える。屋根面に設けられた2面の透明板部分から天空の観測でもしているのでは。



文／藤森照信

Text by Fujimori Terumobu, Photographs by Akiyama Ryoji

連載

現代住宅 第十三回 併走

写真／秋山亮二

名

前は耳にしても、物書きとしてどこから入っていいやらわからない建築家として西沢大良はあった。彼をよく知る伊東豊雄に聞いても、「作品も人柄も印象だけは強いから付き合っているが、何をやりたいのかわからない」。口も交わしたことの無い私がわからなくて当然。

その西沢とちょっと前に伊東さんのプロデュースで、一緒に仕事をしていた、謎は深まるばかり。同時進行で宇都宮にそれぞれ住宅をついたのだが（東京ガスのSUMIKA Project）、現場打ち合わせついでに西沢の住宅に寄ると、大工さんが

ひとりポツンと床に座って、天井を見上げながら、「ルーバーのディテールがまだ決まらなくてストップしてるんだ」。ルーバーなんて何種類もないし、壁に比べりゃ人目が向かわない天井なんてさっさと選べばすむだろうに。

この住宅は最初の案のときから変だった。フラット屋根の天井裏が2mもあるから、屋根裏部屋に使うと思いきや、ただの天井裏で、深いふところを使って空気の流れや屋根面からの光の調整をしたいと言う。フラット屋根も透明な化学樹脂板を使うらしい。

あまりの無駄になぜそう天井方面にこだわるのかプロデューサー

Nishizawa Taira × Fujimori Terunobu

現代住宅 併走



が質しても、朝日の光をベッドの上に落としたいとか、ほかの同席者には枝葉末節の答えばかり。

コンペは入っても2等が多いそうだが、それはそうだろう。なんせ自分の建築で何をしたいのか他人には伝わってこないのだ。2等西沢の汚名を返上すべく伊東さんに相談したら「まず笑顔を覚えろ。話し方も変えたほうがいい」と助言され、笑顔トレーニングもしたそうだが、まだトレーニング不足は否めない。

西沢作品についてウロコがいっぱい落ちたのは、宇都宮のプロジェクト完成後のシンポジウムの壇上でだった。私だけでなく伊東さ

んはじめ藤本壮介などプロジェクト関係者 同はむろん、超満員の聴衆からも初秋の落葉のように群れて落ちたのだから、ひとつの客観の出来事とっていいだろう。

で、路、初秋の（諏訪のハウス）へ。諏訪は私のなつかしの故郷。

まず外観から。やはりわかりにくい。寄せ棟の家形をとってはいるが、左右からの寄せの角度がふつうの寄せ棟よりずっと急で、玄関アプローチから眺めると、屋根のような壁のような、どっちつかず。理由を聞くと、「町屋でもないのに切妻はいやだ。寄せ棟とはつきりわかるのもいや。でも遠くか



3



4

2/高原の野菜畑の中にひとつ立つ大草原の小さな家
4/主室の角。5/主室のハシゴの位置から根太天井の納まりを見る。日形網を半割りしたTカット鋼を2枚組み合わせて梁とし、そ



3 / 主室。根太天井の造りに注目。鉄骨と木材を組み合わせて床とし、それを屋根から鉄バーで吊るといふ工夫をしている。根太天井の一部には半透明の亚克力板が張られ、光がたどえば右手前の食卓の上に落ちるよう工夫されている。暗いなかから落ちてくる光は、教会ならいざ知らず、住宅では珍しい。



6



5

の梁を屋根の日形鋼の梁から鉄バーで吊っている。ロココ風の山小屋風別荘でここまで天井の造りに意識的な建築は珍しい。向こうに見えるのが鉄バー。屋根の日形鋼の梁も、根太天井のTカット組み合わせの梁も、木造では普通はやらない。6 / 右手がデッキ、左手の入り口の先が高天井の台所。

らひと目で家とわかるように家形にはした。この答えで、ねらいどころのわかる読者がどれだけのか。外観をつくる原理をつかみかねている、としか思えない。

そして中へ。中こそ今日の私のねらいどころ。

まず主室（応接室、前室）。目が吸い寄せられたのは、天井のディテールだった。山小屋風の別荘なんだから、ふつうするように、木の梁を架けて木の根太天井とし、そのディテールと部材プロポーションを練れば十分なのに、木材に鉄材を加えて混構造としたうえで、ディテールを練り上げている。たとえば、H形鋼を半割したカットT鋼を2枚合わせて梁とし、屋根からの鉄バーで吊り、そこに木の根太を引っかけ、合板の床を張る。確かに薄くなり、引き締まって見えるが、山小屋風別荘の天井面をここまでやるか。

ほかも同じくらい材と工夫を凝らしていれば納得するが、床も壁もただのラワンやベニヤ板張り。それも、番目立つはずの壁なんか、ベニヤパネルを縦に並べただけのデザイン。せめて壁くらいシナベニヤにできなかったのか。

天

井面でもうひとつ気づいたのは、直接照明はむしろ間接照明

も、ランプの類は見当たらない。空調の類も吹出しを見せない。天井はただ一面の天井で、その一部がアクリル板のトップライトになっていて、屋根のトップライト

から入った光が、屋根裏部屋を通り天井トップライトから室内に入ってくる。この、二重のトップライトも意外に珍しい。

ローコスト作品には前例のない天井面への予算配分に謎を覚えながら、じっくり眺めた後、隣の台所へ。

デッキ側から入り口の向こうの台所に目をやると、気配が違う。施主の川上律子さんがわれわれの軽食のためにコトコトしてくれているのだが、台所にしては上方の空気感が明るく澄んでいるように感じられる。事実入り口から見える壁面も、上のほうがポツと明るい。この明るさと照度分布は照明では得られまい。案の定、中に



7/主室をしのぐ強い印象を与える台所。下から見上げた光の現象に設計者がいかに魅せられているかがわかるだろう。その光も、直射光ではなく、なんらかのフィルターを通した半人工的な光である。

入ると、天井は高く、天井面は全面の半透明アクリル板で、光が四角な筒形をなして降ってくる。

台所の天井が、番高く、空間も充実しているというのはヘンだから、理由を聞くと、「キリスト教関係の集会のとき、大勢が台所で立ち働くから、充実させた」ともたしてもわからない説明。集会のときは、主室のほうがもっと大勢入るだろうに。

西沢は、自分のやりたいことが意識化されていないのではないかと。西沢がこの家で建築家としてやりたかったのは、外観でも室内の床でも壁面でもなく、台所という空間でもなく、天井面と、天井から光が筒状に降ってくる天井のよう

な縦長の空間だった。

私の知る限り、このような天井底のカエルのような視線で建築をとらえている建築家はいない。室内で、高い天井を見上げ、天井に映る光のあれこれに引かれているのだ。天井コンシヤス。近年つくられた「駿府教会」(2008)が西沢の代表作といわれる理由もこれでわかった。

先に述べたウロコハラハラとは、壇上でみまで西沢追究をしているなかで、このことがわかったときの反応なのである。

そ

れにしてもどうしてこんな例のない視点をもつに至ったのか。壇上

では、水泳部出身と指摘されて盛り上がったが、キリスト教との関係もあるかもしれない。世界の教会についてたずねると、サーリーネンの名作「MITチャペル」(1956)の光の注ぐ井戸状祭壇について、「こざかしい演出で、ホストクラブのエントランス」と酷評し、方、ル・コルビュジエの「ロシヤン礼拝堂」(55)については、有名なステンドグラスの大きなほうより、見えない窓から光の降ってくる狭いチャペルのほうがいと評した。井戸の光にはうるさいのだ。

いつかその結晶のような空間がつくられたとき、ふつうの人でも西沢大良の建築を理解できるにちがいない。井戸の光は、人間の心の空間につながる性格をもっているのだから。

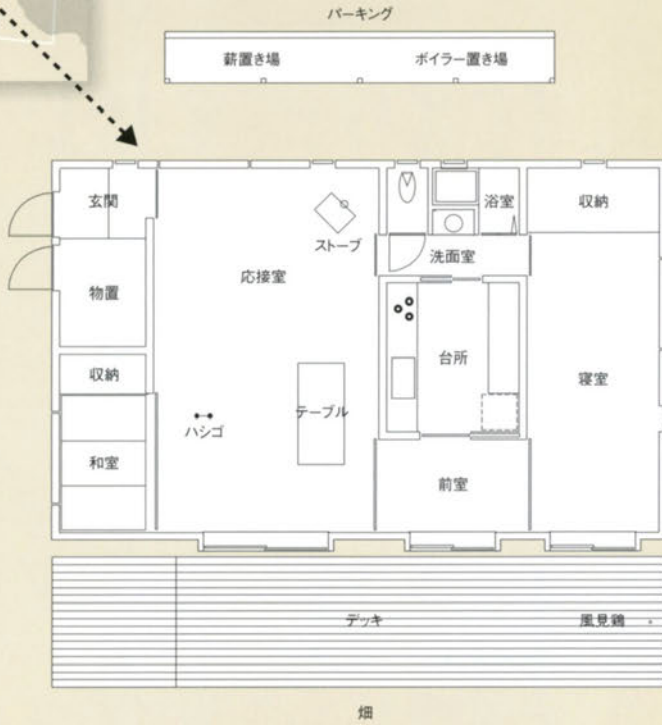
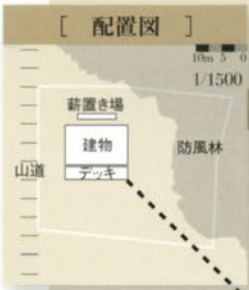
現代住宅 併走

Nishizawa Taira × Fujimori Terunobu

諏訪のハウス

[平面図]

1/150



0
1
2m

[断面図]

1/150



0
1
2m



[東側]



[北側]



[西側]

建築概要

| | |
|-------|------------------|
| 所在地 | 長野県諏訪郡 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 設計 監理 | 西沢大良/西沢大良建築設計事務所 |
| 構造設計 | 伊藤構造計画工房 |
| 施工 | 鈴建 |
| 敷地面積 | 1,009㎡ |
| 建築面積 | 86.12㎡ |
| 延床面積 | 119.25㎡ |
| 階数 | 地上1階 |
| 構造 | 在来木造 |
| 設計期間 | 1997年8月~1998年9月 |
| 施工期間 | 1998年11月~1999年5月 |
| 図面提供 | 西沢大良建築設計事務所 |



8

8/ 井戸底の光ここに極まれり。浴室に降り注ぐ光のシャワー。建築におけるこのような光の演出は、世界にもありそうで前例はない。9/ デッキから南アルプスを眺める屋上の川上さくら、西沢、藤森。



9

西沢大良

Nishizawa Taro

にしざわ たいら/1964年東京に生まれる。東京工業大学で篠原一男と坂本一成に学ぶ。篠原一男が教えた最後の学生のひとり。卒業後、入江経一の事務所に入り、7年後の93年に独立。デビュー作「立川のハウス」(97)は独立後4年目。98年「大田のハウス」につづき99年が「諏訪のハウス」。以後、年一作のペースでゆっくり進み、2004年「紙用町林業総合センター」(08年「駿府教会」)を完成させた。後者は小教会だが西沢の最初のビークを画す作として注目を集めている。

藤森照信

Fujimori Terunobu

ふじもり てるのぶ/建築史家。東京大学生産技術研究所教授。建築家。著書に「明治の東京計画」岩波書店、毎日出版文化賞、「建築探偵の冒険東京篇」筑摩書房、日本デザイン文化賞、サントリイ学芸賞、「藤森照信の原 現代住宅再見(1-3)」(TOTO出版)。建築作品に「神長官守矢史料館」(91)、「タンポポ」ハウス」(95)、「赤瀬川原平邸」(ニラハウス) (97) 日本芸術大賞、熊本県立農業大学校学生寮(2000) 日本建築学会作品賞などがある。

丸の内パークビルディング＋三菱一号館



丸の内パークビルディング(中央の高層ビル)と三菱号館(手前の低層ビル)。写真提供：三菱地所

丸の内の「新しい10年」をスタートさせたトイレ

この10年間で東京・丸の内界隈は大きく様変わりした。ご存じのとおり、三菱地所が1998年から2007年のあいだ、丸の内再構築の第1ステージと位置づけ、丸ビルや新丸ビルなど7棟のビルの建て替えや、丸の内仲通りの再整備により、東京駅前を中心に、活気と賑わいの創出を図ってきた結果である。同ビル管理企画部の安達晋さんいわく、「かつてはオフィス機能オンリーの街で、夜間や休日ほとんど人通りがなかった丸の内を、再構築によって、開かれた多機能な街へと変える取り組みを進めています。最初の10年間の第1ステージでは、商業機能の充実を図り、今では早朝まで営業する店舗も増えるなど、24時間・365日活動する街へと変化し、回遊性が高まりました」。

第2ステージは「文化」もテーマに

08年からの10年間は、丸の内再構築の第

2ステージとして、第1ステージで生まれた賑わいを大手町・丸の内・有楽町の全域に波及させることを目指している。第2ステージのテーマのひとつは「歴史・芸術・文化」。丸の内の歴史を振り返ると、1890年(明治23年)に同社の前身である三菱社が政府の要請により一帯を購入、1894年(明治27年)にはジョサイア・コンドルの設計による最初のオフィスビル「三菱号館」が竣工した。明治40年代には、馬場先通りに赤煉瓦のオフィスビルが建ち並び、その異国情緒あふれる街並みが「丁ロンドン」と呼ばれたのはご存じのとおりだ。三菱一号館は、1968年に取り壊されたが、09年4月に当時の姿に忠実に復元された。これは第2ステージの第1弾プロジェクトにあたる「丸の内パークビル・三菱一号館」計画の環で、同計画は三菱商事ビル、古河ビル、丸の内八重洲ビルの3棟のビルを建て替え、高機能なオフィス機能と商業機能の複合ビル「丸の内パークビルディング」の新築と、「三菱号館」の復元

を同時に行うというもの。「三菱号館」の復元にあたっては、同社が保管していた当時の図面や部材などに基づき、可能な限り忠実に復元された。約230万個の煉瓦についても、当時の製法にこだわりの、中国で一つひとつ成型して製造したという。そして、2010年4月6日、「三菱号館美術館」として開館したのは、丸の内の文化情報発信拠点として活躍することになる。

多様な白の オフィストイレ 重厚感の 美術館トイレ

さて、明治の香り漂う「三菱号館」の内部も興味津々だが、地上34階建ての「丸の内パークビルディング」も、丸の内エリア最大級となる1000坪超の無柱空間を実現した最先端のオフィスを備えた複合ビル。丸ビルを皮切りに、ほかのオフィスビ

ルが手本とするワンランク上のトイレ空間をつくりあげてきた三菱地所だけに、その水まわりも気になるところ。両棟のトイレを取材した。

まず最初に見学したのは、「丸の内パークビルディング」のオフィス基準階のトイレ。設計を担当した三菱地所設計の高田慎也さんによれば、同ビルではエレベータホールや廊下などの共用部をあたたかみのある落ち着いた空間にするため、照明の色温度を3000ケルビンに抑えているという(一般的なオフィスビルで4200ケルビン)。そこで、トイレ空間はそれとはメリハリをつけ、内装色は清潔感のある白を基調とし、かつ外光を取り入れることで、執務空間からトイレに入ったときに、リフレッシュ感をもっていたいただきたいと考えました」と高田さんは言う。

実際にトイレ手前の共用廊下を歩いてみると、確かに通常のオフィスと比べ、暖色系の明かりが上質感をかもし出しているが、トイレ内に入ると開口部からは自然光が射



丸の内パークビルディング
のオフィス基準階（56ページも同じ）の女子トイレ。
右手ブースコーナーと洗面
コーナーがパーティション
で仕切られ、お互いの視線
が交わらないように配慮さ
れている。動線もスムーズ。

丸の内パークビルディング

Marunouchi Park Building

Mitsubishi Ichigokan

三菱一号館



復元された三菱一号館は、
2010年4月に「三菱一号館
美術館」としてオープン予
定。2階の男子トイレを見
る。壁面はオリジナルの煉
瓦躯体を内装に生かしたし
つらえとしている。

女子トイレ



入り口

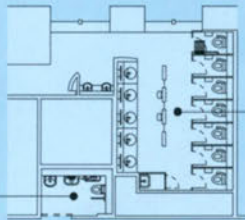
入り口から見る。右手は歯磨きコーナー。ビルの外壁のアーチ形状が、ところどころに採用されている。

男子トイレ



洗面コーナー

ゆとりの洗面コーナー。左に歯磨きコーナー。男女とも白を基調にした清潔感あふれる内装と照明。

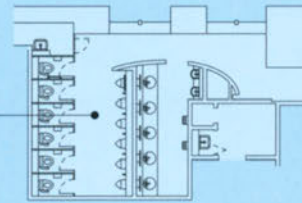


女子トイレ

多目的トイレ

1/300

0 2 4m



男子トイレ

1/300

0 2 4m



ブース

女子トイレブースのひとつには、フィッティングボードが設置されている。



多目的トイレ

各フロアに1カ所ずつ設けられた多目的トイレ。



通路

便器コーナーから入り口方向を見る。左手窓からは自然光。中央にのぞく開口部を右に入ると洗面コーナー。便器コーナーとは完全に分けられている。

ところで、最後にトイレの設計で苦労した点に話がおよんだ際、安達さんが話したエピソードが印象的だった。

今回のトイレづくりにあたり、ビル管理企画部では、これまでに自社が手がけた丸の内界隈のオフィスビルのトイレをすべて実測してまわるとともに、ブースの幅と奥行き感覚的な広さをあらためて体感した

広さの感覚は
奥行きよりも
幅に
左右される

し込み、内装も白で統一されているため、
気に目が覚める印象だ。

内部の間仕切り壁はゆるやかにカーブしているが、これはビルの外壁に見られるアーチ形状を取り入れたものだという。よく見ると、同じ白でもタイルはマットなものと艶のあるものを使い分け、アーチの壁は塗り壁にするなど、内装は様ではない。

「多様性のある白を表現したかった」と高田さん。

これに対し、「三菱一号館」のトイレは対照的。外光が入る十分明るい空間だが、茶系を基調にしたインテリアには外観のイメージそのままの重厚感が漂っている。とくに目を引くのは、洗面カウンターや小便器コーナーの上の壁面。組積造の煉瓦壁面がむき出しになっており、凹凸のある表情が間接光に照らし出されて美しい。建物内の廊下などの壁面はほとんどが白い漆喰仕上げなので、トイレは内部で数少ない、煉瓦の壁が見て触れられる貴重なスペースだそう。

丸の内パークビルディング+三菱一号館

建築概要

| | |
|--------|---|
| 所在地 | 千代田区丸の内二丁目6番1号、2号 |
| 主要用途 | 事務所、店舗、美術館、 地域冷暖房施設、 駐車場など |
| 事業主 | 三菱地所 |
| 設計監理 | 三菱地所設計 |
| 施工 | 建築：竹中工務店 |
| (主要工事) | 電気：きんでん、 東光電気工事、弘電社 |
| | 空調：高砂熱学工業 |
| | 衛生：斎久工業 |
| | 昇降機：三菱電機、日立製作所 |
| 敷地面積 | 約 11,900㎡ |
| 延床面積 | 約205,000㎡ |
| | 事務所：約158,000㎡ |
| | 店舗：約 18,000㎡ |
| | 美術館：約 6,000㎡ |
| 階数 | 丸の内パークビルディング： 地下4階、地上34階、塔屋3階 三菱一号館：地下1階、地上3階 |
| 構造 | 丸の内パークビルディング： 鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造 三菱一号館：煉瓦組積造 |
| 設計期間 | 2003年7月～2007年1月 |
| 施工期間 | 2007年2月～2009年4月 |
| URL | www.marunouchi.com/brick/ |

おもなTOTO使用機器

丸の内パークビルディング

オフィス基準階

| | |
|---------|---------|
| 大便器 | UTEC43 |
| 小便器 | UTEU53 |
| 洗面器 | UTEL |
| 歯磨きコーナー | L830DRU |
| 多目的トイレ | UTED51 |

三菱一号館

| | |
|-----|----------|
| 小便器 | UFS800CE |
| 洗面器 | L710CM |

女子トイレ



ブース

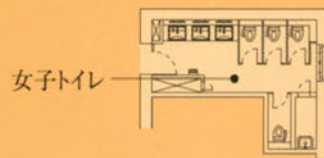
ブース内の壁面にも組積造の煉瓦が顔を出し、茶系を基調にした重厚なインテリアとなっている。

男子トイレ



小便器コーナー

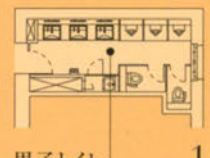
凹凸のある煉瓦の壁面が、間接光に照らし出されて美しい。



女子トイレ

1/300

0 2 4m



男子トイレ

1/300

0 2 4m



入り口

廊下から入り口を見る。丁寧に復元されたドアまわり。



ブース

やわらかな自然光が入る。



洗面コーナー

濃い茶色に白い洗面器が映える。

という。その結果、たとえば丸ビルのプロセス幅は壁芯で900mmに対し、新丸ビルは940mmで、奥行きは丸ビルのほうが長いにもかかわらず、新丸ビルのほうが広く感じられるなど、奥行きより幅のほうが数センチの差でも受け取る感じが大きく左右されることがわかったとのこと。

こうした調査をもとに出来上がったこのビルのオフィストイレのブース幅は、片端を除くすべてについて壁芯で930mmを確保。男女とも、ブース自体の数に余裕をもたせながらも、限られたスペースの中で各ブース内空間を犠牲にせず、ゆったりとした空間を確保することを目指したそうだ。

こうした細やかな配慮をどれほどオフィスワーカーたちは意識しているのだろうか。テナント入居後の感想はと問うと、「とくにコメントは聞いていませんが、それがもしかすると一番いい感想かもしれません。トイレに対して聞こえてくる声の大半はクレームです」と笑う高田さん。

つくり手の地道な努力によって、丸の内界隈のオフィスとトイレの快適性は今後10年間も着実に向上していくにちがいない。



三菱地所
ビル管理企画部 参事

安達 晋



三菱地所設計
建築設計一部 主事

高田 慎也

写真左/社長の福家淳さん。2009年夏にオープンした新展示場COCaGE(こかげ)の前にて。右/2棟の展示棟のうち、コートハウス形式のFULのダイニング キッチン。



住まい手とともに考える

代表取締役

福家 淳さん

風貌どおりの、おだやかな人柄である。決して多弁ではない。だが内に熱いものを秘めているのだらう。建築とは無縁の職場からフクヤ建設を興し、一代で高知県内でも屈指の地域ビルダーへと会社を育て上げた福家淳さんは、必要な言葉を選びながら、過去から未来までを語ってくれた。

建て主の要望を的確につかむ自信

福家さんが学校を出て最初に就

職したのは自動車メーカーだった。設計を担当し、やがて販売もするようになる。だが会社が大手メーカーに吸収合併されたのを機に、親兄弟の暮らす高知に戻って住宅メーカーの営業へと転身。住宅メーカーを選んだのは、設計を業としていた兄の誘いによるものだったそう。

住宅の営業を始めてしばらくたった頃、自分のお客さんの家が、必ずしも期待どおりにできていないことに気づく。設計担当者が的確に客の要望をつかんでいない。自分がプランをつくったほうが、お客さんが喜んでくれる。そんな状態が続いて独立を決意。畑違いの建築の世界に飛び込んで約4年、福家さんは26歳でフクヤ建設を創業した。

熟年層の信頼を得る 細やかな対応

「お客さんは、命を担保にして家の資金をつくる。だからお客さんに喜んでもらえることを、一番に考える」というのが、福家さんの創業以来のポリシー。ただご本人も「これはどこでも 緒でしょう」と苦笑するように、それだけではフ

クヤ建設が業績を伸ばしてきた理由がわからない。何が理由か。福家さんが現場の最前線でもばり働いていた10年ほど前まで、依頼者は50〜60代が中心だったという。地域性もあるのかもしれない。しかし家を建てようとする世代で、圧倒的に多いのはやはり30〜40代ではないのか。

独立の経緯からも、福家さんは人一倍依頼者との距離が近いのかわかる。

創業の頃の、こんなエピソードもある。「営業に行くとき、喜んで家に上げてくれて、ご飯まで食べさせてもらって、帰るときに契約書にハンコを捺してくれるお客さんがたくさんいた」、「ひとりのお客さんの紹介で10棟建てたこともあった」。

依頼者の要望を聞き、その言葉の表面的な部分だけでなく、彼らが本質的に希求するものを汲み取ることができるとのらう。だから自分をアピールすることが苦手な熟年世代からも高い支持率を得られるのではないか。そして人柄。好感と信頼を得る丁寧な接客、細やかな対応。言葉にすればありきたりだが、そこに真心がこもり、会社の体質になったとき、大きな力となっていく。



Housing Company

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、
それぞれの土地柄、会社の性格、
そして会社をリードする人物の性格、
マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

FUKE KIYOSHI FUKUYA CONSTRUCTION CO., LTD.

Data



FUKUYA CONSTRUCTION CO., LTD.

フクヤ建設(株)

本社所在地 高知県高知市
 高野西町2-18-19
電話 088(845)4618
代表取締役 福家 淳
会社設立 1971年
従業員数 20名
事業内容 総合建設業
 不動産業
 一級建築士事務所
売上高 7億8,300万円
 (2009年8月期)
URL www.fukuya-h.co.jp/

フクヤ建設住宅展示場 COCAGE FUUの TOTO使用機器

キッチン セラキッチン水栓
浴室 いものホーローバス
トイレ ネオレストAH



四角いFUU(写真上)と三角のSUU(下)。FUUは体験宿泊も可能。2階角の木の部分が、バスコート。SUUの階段状のルーバーは、屋根面への直射を遮り、夏場でもほぼエアコン不要の室内環境をつくり出す。

写真上/三角形の棟 SUUの内部の様子。太い登り梁が合掌風に大空間を支える特殊な構造。2階の広いLDKは、テラスも含めてどこでお茶を飲んでもよい自由なカフェ。吹抜けでつながる2階は、福允孝氏選定の木が並ぶライブラリーとなっている。写真下2点/FUUの浴室とトイレ。2階の浴室は、バスコートをもつ明るい空間となっている。

福家 淳(ふけ きよし) / 1945年香川県生まれ。工業高等専門学校で機械を専攻し、卒業後、プリンス自動車工業に就職、設計、販売を担当する。会社が日産自動車と合併したのを機に、親兄弟が移り住んでいた高知に戻り住宅会社に入社。約4年間営業として活動した後、独立し1971年フクヤ建設を創業した。

新しいステージに向けた 大胆な舵取り

2009年7月オープン。フクヤ建設の新展示場は、建築関係者のみならず多くの高知市民を驚かせた。展示場の建物とは思えない大胆なフォルム。カフェ、ライブラリー、体験宿泊など、およそ従



来の住宅展示場のイメージとかけ離れている。2棟のうちの1棟(SUU)は、設計を建築家・谷尻誠氏、構造を名和研二氏が担当。ライブラリーの本の選定はブックディレクターの福允孝氏による。共同住宅展示場への出展から単独開設へ、さらに展示場のコンセプト自体を「商品を見せる」から「気持ちよささを感じて、家について考える」へ大幅に方向転換。「昔は、たとえば力のある営業マンがグイグイみんなを引っ張るような感じでしたが、今は、設計も営業も現場もみんなが集まって一緒に考えるようなスタイルです。これも若い人たちが考えて、みんながやりたい、というものを形にしたんです」

クヤ建設のホームページではほとんど紹介されていない。標準的に使っているムクの木や漆喰などの自然素材についても同様だ。そこに、仕様や性能をウリにして他社との差異化を図るのではなく、その先を大切にしたい、という会社の姿勢がうかがわれる。とことん誠実に建て主と付き合うこと。つくり手の考える「いい家」ではなく、住まい手が考える「いい家」を追求すること。創業以来の信念をそのままに、若い世代にバトンを手渡すべく、社長自らがいきって次のステージへと舵を切った。

*FPF軸組工法「柱と梁で構成された構造物に「FPFパネル」を組み込む独自の工法。グラスウールなどの繊維系断熱材を用いる一般的な工法と比べ、断熱性能は約2倍、耐久性にすぐれ、性能劣化がほとんど見られない。また、硬質ウレタン断熱パネル自体が強度をもち、構造物と一体となつて建物の耐久性、耐震性を向上させるなど多くのメリットがある。

TOTO出版が

20周年を

迎えました

TOTO Publish
20th
Anniversary

TOTO株式会社の文化活動の環として1989年にスタートしたTOTO出版は、おかげさまで2009年に20周年を迎えることができました。「都市 水 人」をキーワードに、建築 デザイン 生活文化をテーマに20年間で300冊あまりの書籍を刊行し、累計発行部数は200万部を超えました。冊 冊の個性に合わせ、編集やデザインを考える丁寧な本づくりは、国内はもとより国際的にも高い評価を得ています。建築 デザイン文化がより大きく育つことを願って、TOTO出版はこれからも充実した出版活動を続けてまいります。今後のTOTO出版に、ぜひ、ご期待ください。

TOTO出版ブックリスト 1989-2009

1989年

- ・プロドゥエイ プロドゥエイ*
- ・紫式部 すまいを語る*
- ・兼好法師 すまいを語る*
- ・小林 東 すまいを語る*
- ・「江戸東京」水をもとめて四〇〇年*
- ・THE BATHROOM*
- ・給排水衛生設備学 上級編*
- ・流れのフィジックス*

1990年

- ・留学生日本シギ体験*
- ・アーバニズム宣言*
- ・トイレの前は気をつけよう*
- ・トイレをたすけたらどうなるか*
- ・地下鉄に乗ってキリンを見に行ったトイレ*
- ・例のない遠い国*
- ・なまなまがトイレでなかったこと*
- ・給排水衛生設備学 中級編*
- ・パッドシテイの快樂学*
- ・トイレは笑う* 1

1991年

- ・カフェの光景*
- ・宇宙生活への招待状*
- ・デザイナーのためのトイレブック*
- ・給排水衛生設備学 初級編*
- ・スカラベの見たもの*
- ・建築空間と想像力*
- ・場所との対話*
- ・わが街パルセロナ*
- ・STAR PIECE*
- ・倉俣史朗のイメージスケッチ* 2
- ・空とくまのトナリ*
- ・香りのバスタイム*
- ・水道工事店物語*
- ・水道工事店物語2*
- ・昭和和生活文化年代記1

1992年

- ・昭和和生活文化年代記2
- ・昭和和生活文化年代記3
- ・昭和和生活文化年代記4
- ・昭和和生活文化年代記5
- ・シャワーをあびて*
- ・タイルの美「西洋編」*
- ・けんきになったフォルテ*
- ・インサイド ロンドン*
- ・銭湯へ行こう*
- ・Zアール「毛織職対談集」*
- ・21世紀のホテル産業像*
- ・澤の屋は外国人宿*
- ・水この壊れやすく美しく純粋な存在*
- ・神長官守矢史料館*
- ・建築空間と想像力PART2*
- ・インサイド パリ*
- ・吉村順三を聞く* 3
- ・トイレでホッ*
- ・石川県能登島ガラス美術館*
- ・やんごとなき姫君たちのトイレ 4
- ・イスはそのときなぜ片足をあげるのか*
- ・ルイス パラガンの建築(普及版)*
- ・ルイス パラガンの建築(愛蔵版)*
- ・八代市立博物館 未来の森ミュージアム*
- ・アーキテクト01 黒川雅之の卓越功*
- ・寄生虫博士トイレを語る*
- ・ホテルイル パラッソ*
- ・長生きは家づくりから

1993年

- ・東京アートディレクターズクラブ 原弘賞
- ・「ルイス パラガンの建築」
- ・「ころとからだの悲鳴が聞こえる」
- ・富山県こどもみらい館*
- ・銭湯へ行こう イスラム編*
- ・ニユーヨークのオーナメント*
- ・給湯設備のABC

1994年

- ・この世はすべて泡だらけ*
- ・からだによい水、地球によい水*
- ・詠み人知らずのデザイン
- ・アーキテクト02 北川原温×稲越功二*
- ・梅田スカイビル*
- ・銭湯へ行こう 旅情編*
- ・ティームテイスト ビルディング*
- ・三つの「舞台目録」
- ・江戸の女たちのトイレ*
- ・冬山河親水公園*
- ・女のトイレ事件簿*
- ・「やんごとなき姫君たちの寝室」
- ・水の世界*
- ・パス トイレのデザインブック*
- ・やんごとなき姫君たちの寝室
- ・インサイド パルセロナ*
- ・世界のベストホテル50*
- ・モフフィントの僧院世界*
- ・スリランカ古代装飾トイレの謎*
- ・建築MAP東京*
- ・タイルの美「イスラム編」
- ・熟年夫婦、パリに住む*
- ・地球家族 5
- ・江戸の女たちのグルメ事情
- ・住まいが決める日本の家族
- ・水と暮らしの文化史

1995年

- ・建築の危機を超えて*
- ・リアス アーク美術館*
- ・マクラーホルンの空中トイレ
- ・水とこみの環境問題*
- ・人間 王貞治*
- ・銭湯MAP東京*
- ・世界のトイレ快速を行く*
- ・インサイド ニューヨーク*

1996年

- ・インサイド ニューヨーク(普及版)*
- ・Felix Candia*
- ・よくわかる増改築*
- ・これが建築なのだ
- ・ジャンヌ スーヴェルリニエール光一*
- ・住まいの水まわり学入門
- ・世界の建築家581人 6
- ・場の変換 GALLERY MA 1985-1985*
- ・やんごとなき姫君たちの食卓*
- ・お湯まわりのはなし
- ・水の原風景
- ・牛田英作×キャサリン フィンドレイ
- ・PARALLEL LANDSCAPES*
- ・わが家は快適お風呂
- ・パブリック ボディ イン クライシス*
- ・篠原一男* 7
- ・サレジオ*
- ・インド建築案内 8
- ・ニール ティナーリインタラファウンド プロ
- ・ジェクシヨンス*
- ・砂の楽園 コロパの僧院世界
- ・横文彦 建築という現在 現場からのリ
- ・ポート*
- ・ルイス パラガンの建築(改訂版) 9
- ・磯崎新の革命遊戯

1997年

- ・毎日芸術賞特別賞
- ・「篠原一男」
- ・シラカンス JAM*
- ・建築家への道 10
- ・くらしのきもち*
- ・アメリカ西海岸温泉紀行*
- ・オスカー ニーマイヤー1937-1997
- ・暮らした歴史 生き生き平安京
- ・お風呂考現学
- ・藤江和子の形象 風景へのまなごし

もう20年も たったのか。

祝TOTO出版20周年

文 藤森昭信
建築史家 建築家

乃木坂のあの場所には、その昔、モダンの水で洗われた西洋館系のシャレた建物があつて、確か日本のミッシヨンの系が所有していた。日本人離れしたデザインだったから、外国人建築家の誰かが手がけたものだろう。建築探偵団を始めた当初の成果のひとつだった。

やがて、静かなあの一帯にビルが建つようになり、TOTOの青いビルが誕生し、TOTO出版とギャラリー 間が活動を開始した。当時、私の所属する研究所はすぐ近くにあったこともあり、活動には注目していたが、両活動とも、目の付けどころ が違つ、と感心した。

日本を中心とするが海外建築家でも、TOTO出版で初めて作品集をまとめた建築家は多い。私も、建築家としてはそのひとつになる。

少し前、シドニーに行ったとき、オペラハウス以外見たいものも思いつかないので、ふと美術館に入ると、TOTO(ギャラリー 間)の全面協力でグリーンマーケット建築展をやっている。オーストラリア初のブリッッカー賞に輝くこの建築家の作品集を、日本で初めて刊行したのはTOTO出版なのである。目の付けどころは広く海外にまでおよんでいる。

TOTO出版の刊行物で日頃から愛用するのは日本と世界の建築ガイドだが、ますますの充実と持続を期待したい。



- ・建築の詩人カルロ スカルパ
- ・建築の地球学
- ・世界の名酒と美食、なるほど面白誌*
- エドトレ ソフトサス 151ドローイングス
- ル・コルビジエ エラ トゥーレット修道院*
- ル・コルビジエ カップ マルタン の休暇*
- ・人生をたがやす週末農園
- ・旅好き、もの好き、暮らし好き
- ・地球家族 11

1998年

- ・建築MAP京都 12
- ・野菜物語
- ・イタリア出会いの街 思い出のレシビ
- ・藤森照信 野蛮ギャルド建築
- ・建築MAP北九州*
- ・新・水とこみの環境問題 環境工学入門編*
- ・レンゾ・ピアノ 航海日誌
- ・反対称の物語
- ・これが幸せ*
- ・齋藤裕の建築
- ・ヨーロッパ建築案内 1 13

1999年

- 第33回造本装幀コンクール
- ・自然科学書部門入賞
- 「ヨーロッパ建築案内1」
- ・坂茂プロジェクト イン プロセス*
- ・建築家たちの20代 14
- ・建築MAP大阪/神戸 15
- ・新居千秋 喚起/歓喜する建築
- ・面出薫+L.P.A 建築照明の作法*
- ・改訂新版 給排水衛生設備学 初級編*
- ・ヨーロッパ建築案内 2
- ・石山修武 考える、動く、建築が変わる
- ・ヤン・ケルサレリ エミール マチエール

2000年

- ・青木淳 Atmospherics
- ・見る測る建築
- ・宮脇俊之住宅 1964-2000 16
- ・テザインの未来考古学
- ・岸和郎 PROJECTed Realities
- ・改訂新版 給排水衛生設備学 中級編
- ・早稲田ハウス スカールの実験
- ・住宅という場所*

2001年

- ・磯崎新 UNBUILT/反建築史
- ・ヨーロッパ建築案内 3
- ・近代建築の証言 17
- ・場の変遷のGALLERY MA 1996-2000

- ル・コルビジエの全住宅 18
- ・難波和彦「箱」の構築
- ・空間から状況へ
- ・ビカビカキッズ大好き
- ・GOOD LOOKING LIFE
- ・東京1建築 都市伝説* 19
- ・坂本一成 住宅1 日常の詩学

2002年

- 第36回造本装幀コンクール入賞
- 「近代建築の証言」
- 「ル・コルビジエの全住宅」
- 「世界で最も美しい本」国際コンクール銅賞
- 「近代建築の証言」
- ・リアリテル コルビジエ
- ・テクトニク カルチャー
- ・建築家と家をつくる愉しみ
- ・夢のまにまに夢を見る
- ON THE SITUATION KOH KITAYAMA
- 1993/95-2002 北山恒の建築
- カーサ パラガン 20
- ・アーキトラベル 建築をめぐる旅
- ・Shaded 古谷誠章の建築ノート
- ・日本の家空間 記憶 言葉 21
- ・建築を思考するディメンション
- ・坂本成との対話
- ・建築MAP横浜 鎌倉
- ・コンスタント・イン・メリーニの建築
- 1920s-1930s
- ・ロシア建築案内 22
- ・藤森照信の原 現代住宅再見
- ・もちと知りたいたい建築家

2003年

- 第37回造本装幀コンクール
- ・自然科学書部門入賞
- 「日本の家」
- 「建築を思考するディメンション」
- ・建築MAP東京「改訂版」 23
- ・建築MAP東大 2
- ・建築MAP東京 24
- ・建築MAP東京 2
- ・真庭
- ・ルイス・カーンの全住宅
- 1940-1974 25
- ・建築の向こう側

2004年

- ・高橋誠二/第二房 1960-2005*
- ・イギリスの住まいとガーデン
- ・空間から状況へ
- ・ビカビカキッズ大好き
- ・GOOD LOOKING LIFE
- ・東京1建築 都市伝説* 19
- ・坂本一成 住宅1 日常の詩学

- ・Realising Design
- ・行動主義1レム コールハース
- ・ドキュメント 26
- ・承孝相 張水和 Works:10+2
- MOD EAST
- ・西沢大良 1994-2004
- ・藤森照信の特選美術館三昧 27
- ・庭の旅
- ・学校をつくらう！
- ・世界の美術館 未来への架け橋
- ・Angelo Mangiarotti*
- ・住まいることは手帖
- ・建築MAP東京中100
- ・建築MAP京都中100
- ・LOVE ARCHITECTURE*
- ・ジャン・ブルーワ
- ・ティスクリート シティ

2005年

- ・アメリカ建築案内 1
- ・阿部仁史 FLICKER
- ・僕らはこうして建築家になった。
- ・インフォリアル
- ・SANNA/金沢21世紀美術館
- ・WHAT IS OMA
- ・FLUX STRUCTURE
- ・「光の家具」照明
- ・木洩れ日の庭で
- ・アスフレンドの建築 1885-1940
- と/と
- ・ウィラ マイレア アルヴァ アールト
- ・テザインの輪郭 28
- ・建築MAP東京 2 min
- ・場の変遷のGALLERY MA 2001-2005
- ・日本の現代住宅 1985-2005 29
- ・吉阪隆正の迷宮

2006年

- ・にはんの建築家 伊東豊雄 観察記
- POST OFFICE ワークスペース改造計画
- ・手塚貴晴+手塚由比 建築カタログ 30
- ・地球の食卓 31
- ・ルミノシティ/ポロシティ
- ・サイドウェイ 建築への旅
- ・TSUTOMU KUROKAWA 黒川勉のテザイン
- ・藤森照信の原 現代住宅再見 3
- ・タッチストーン 大橋晃朗の家具

2007年

- ・安藤忠雄の建築 1 32
- ・図解アトリエ ワン 33
- ・建築をつくることは未来をつくることである
- ・未完の建築家 フランク ロイド ライト 34
- アルヴァロ シザの建築
- ・新装改訂水とこみの環境問題
- ・藤森照信建築 35
- CULTIVATE
- ・Delicious Lighting
- ・堀部安綱の建築
- ・28の主題 迫慶郎の建築
- ・中国でつくる 松原弘典の建築

- 住宅の射影
- title of the site そこにしかない形式
- ・アメリカ建築案内 2
- ・安藤忠雄の建築 1 32
- ・図解アトリエ ワン 33
- ・建築をつくることは未来をつくることである
- ・未完の建築家 フランク ロイド ライト 34
- アルヴァロ シザの建築
- ・新装改訂水とこみの環境問題
- ・藤森照信建築 35
- CULTIVATE
- ・Delicious Lighting
- ・堀部安綱の建築
- ・28の主題 迫慶郎の建築
- ・中国でつくる 松原弘典の建築

2008年

- 第42回造本装幀コンクール入賞
- 「未完の建築家 フランク ロイド ライト」
- ・安藤忠雄の建築 2
- ALTO 10 Selected Houses
- ・アールトの住宅 36
- ・建築MAP九州/沖縄
- ・日本の庭 ことばはじめ 37
- ・クレン マーカットの建築
- ・クレン マーカットの建築
- ドローイング
- ・ワーキング ドローイング
- ・安藤忠雄の建築 3
- ・北欧のノーマイゼーション
- ・中国歴史建築案内

2009年

- 第43回造本装幀コンクール審査員奨励賞
- 「ワーキング ドローイング」
- 第50回全国カタログ ポスター
- ・展覧委員特別賞
- 「アレン マーカットの建築」
- 「アレン マーカットの建築」
- 「ワーキング ドローイング」
- 「日本の庭 ことばはじめ」
- ・リートフェルトの建築 38
- Bath Views
- ・手塚貴晴+手塚由比 建築カタログ 2
- ・「EUC」クラウンダイサムアーキテクト 39
- ・アルベルト カンポ バエサ 光の建築 40
- ・スタアイズ イン オーガニク

2010年

- ・印は品切れです(09年12月末現在)。



TOTO出版20周年 記念イベントのご案内

第1弾

「近著と建築・デザインを語る」

日本を代表する建築家テザイン+13氏の著書がTOTO出版より刊行されます。これを記念して、東京・仙台・福岡の各都市にて講演会を開催いたします。それぞれの著書に展開される各氏の思想からその創造の源まで、自ら熱く語っていただく貴重な講演会です。

- 講演会
- 第1回 磯崎新 3月2日(火) 東京/津田ホール
 - 第2回 杉本貴志 3月5日(金) 福岡/都久志会館
 - 第3回 原広司 3月17日(水) 仙台/仙台市民会館
- いずれも17時30分開場、18時30分開演、20時30分終了予定
- 参加方法 事前申込制
- 入場料 無料

第2弾

「建築家の読書術」

今最も活躍が目ざましい30代の建築家たち。彼らはどんな本を読んできたのでしょうか。話題の建築家5人がそれぞれ秘蔵の「読書術」を披露します。

展覧会

会期 2010年10月26日(火)~2月6日(土)

開館時間 11時~18時(金曜日は19時まで、日曜日と月曜日は休館)

会場 ギャラリー1 間

東京都港区南青山1-24-3

TOTO乃木坂ビル3階

入場料 無料

無料

- 入場料 無料
- 第1回 平田晃久 1月26日(火)
- 第2回 藤本壮介 1月28日(木)
- 第3回 中村拓志 1月30日(土)
- 第4回 吉村靖孝 2月2日(火)
- 第5回 中山英之 2月4日(木)
- 第6回 倉方俊輔(総括) 2月6日(土)
- いずれも18時開場、18時30分開演
- 会場 ギャラリー1 間
- 定員 各回80名
- 参加方法 事前申込制
- 入場料 無料

TOTOの最新情報

TOTO

TOTO news 3

「TOTO通信」ウェブサイトのお知らせ

「TOTO通信」は、PR誌の本文をそのままウェブサイトでもご覧いただけます。特集で取り上げた建築家や建築事例の関連サイトにもリンクしているほか、ウェブオリジナルコンテンツ「イン デイテール」や「編集ノート」もご用意しておりますので、ぜひ一度アクセスしてください。

TOTO news 4

「UD Style—ハナコさんの暮らし」ウェブサイトをオープンしました

「UD Style」は、安心して使いやすいユニバーサルデザインの商品と快適な暮らしのスタイルをご提案するUD情報サイト。ハナコさん家族が、キッチン、バスルーム、洗面所、レストルームの魅力をお伝えします。「UD Style」では日経デザイン編集部の記事による、暮らしのUD情報「ホッとワクワク」を毎月お届けします(毎月10日頃更新)。ぜひ一度ご覧ください。

TOTO news 5

ウェブサイト「カタラボ」TOTOのカタログも掲載しています

「カタラボ」(㈱日本建材 住宅設備産業協会*)は、建材と住宅設備のカタログを電子ブック形式で集めたウェブサイト。「キーワード検索」や気に入ったページをストックできる「お気に入りページ」機能など多彩な機能を装備して、知りたい情報を簡単に探すことができます。よい家づくりやリモデルにはインテリアやエクステリアの建材や設備を吟味することも大切です。「カタラボ」はTOTOの水まわり製品はもちろん、建材や設備のカタログもご覧いただくことができます。

*㈱日本建材・住宅設備産業協会は、TOTOはじめ建材・住宅設備メーカーが加盟している業界団体。
お問い合わせ/㈱日本建材 住宅設備産業協会
所在地/東京都中央区日本橋浜町2-17-8 KDX浜町ビル5F
電話/03(5640)0901
ファクス/03(5640)0905

TOTO news 1

GOOD DESIGN AWARD / URL ▶ www.g-mark.org/



グッドデザイン金賞受賞

TOTOの「レストルームアイテム01」が、2009年度グッドデザイン金賞を受賞。3,000点近い商品のなかから、公共トイレの統一感ある調和のとれた空間を実現し、使用者のマナー向上にも寄与することが評価されました。また、タンクレストイレ「ネオレスト」は、1993年から累計出荷台数100万台を突破。長く支持され愛用されている商品としてグッドデザイン・ロングライフデザイン賞を受賞。デザイン・先進技術で、トイレ空間づくりをリードする商品として評価されました。

写真右/グッドデザインエキスポ2009の様子。左/グッドデザイン・ロングライフデザイン賞受賞のタンクレストイレ「ネオレスト」



[ネオレスト]



[レストルームアイテム01]

TOTO news 2

カレンダー表紙

2010年版 TOTOドローイングカレンダーをご紹介します



2010年版 TOTOドローイングカレンダー

今年のカレンダーは、タンザニアに生まれイギリスで学んだ建築家デイヴィッド・アジャイ氏の建築ドローイングです。秀逸なセンスで駆使した光と素材が、スタイリッシュな造形、魅力的な色彩を際立たせる作品は、その洗練されたデザイン性によって高く評価されています。数々の著名な建築を誕生させた

発想の萌芽が占めるドローイング。今回のカレンダーでは、ギャラリー・間での展覧会(*)に先駆けその一部をご紹介します。同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方のなかから、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

*7月には、ギャラリー・間(東京・乃木坂)で日本初の個展を開催、氏の来日講演会を予定しております。

URL ▶ www.toto.co.jp/tsushin/

URL ▶ www.toto.co.jp/ud/style/

URL ▶ www.katatabo.org

www.cera.co.jp

セラのお知らせ



cera trading news

「FARAWAY」 コレクション 2月新発売



水栓金具: ZU0298/
 ¥90,300(税込)
 洗面器: ZU7L043/
 ¥258,300(税込)

イタリアのメーカー、
 ブケッティ社製水栓
 は、ルドヴィカ&ロベルト
 ・パロンパデザインによる
 もの。昨年3月にドイツで
 開催された水まわり展示会
 ISHで発表された注目のコ
 レクション。コス社洗面器
 シリーズと併せて「Faraway

＝せわしない日常から遠ざ
 かり、やすらぎの時間をも
 たらす」コレクションアイ
 テムです。
 カタログをご希望の方は、
 セラトレーディングホーム
 ページ、または電話 ファ
 クスにてお申し込みくださ
 い。

www.toto.co.jp/gallerma/

ギャラリー・間展覧会のお知らせ



GALLERY・MA exhibition

次回予告 竹原義二展

大 阪を拠点に、住宅を
 中心に設計を手がける
 建築家、竹原義二氏（無
 有建築工房主宰、大阪市立
 大学大学院教授）の展覧会
 を開催いたします。日本の
 伝統建築の空間構成や素材、
 技術を独自の視点で読み解
 き、自身の建築空間に新た
 な解釈で取り入れ、職人た
 ちとの協働によって丁寧に
 練り上げられた150を超える
 作品群は、1996年に村野
 藤吾賞を受賞するなど高い
 評価を受けています。
 展覧会では、竹原建築のス
 ケールを体感できる空間が
 出現する予定です。また、
 手描きの原図も多数展示し、
 竹原義二氏のモノを見る目
 とつくる姿勢にせまります。



「101番目の家」(2002/大阪府)
 写真/絹巻 豊

Information

会期/4月14日(水)~6月19日(土)

竹原義二展

講演会/4月16日(金)18:30~20:30
 会場/津田ホール(東京都渋谷区千駄ヶ谷)
 参加方法/事前申込制
 申込期間/2月17日(水)~3月25日(木)
 *詳細はギャラリー 間ウェブサイトをご覧ください。

セラトレーディング

- 所在地/東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル1階 地下1階
- 電話/03(3796)6151
- ファクス/03(3402)7185
- 営業時間/10:00~18:00
- 定休日/日曜日 祝日
夏期休暇 年末年始

ギャラリー・間

- 所在地/東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3階
- 電話/03(3402)1010
- ファクス/03(3423)4085
- 開館時間/11:00~18:00
(金曜日のみ11:00~19:00)
- 休館日/日曜日 月曜日 祝日および
展示替え期間 夏期休暇 年末年始
- 入場料/無料



次号「TOTO通信」は2010年4月上旬発行予定です。

アクセス/●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分●東京メトロ銀座線 半蔵門線 都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

あしたを、ちがう「まいにち」に。

TOTO

単体として考えない。



今までのトイレに足りなかったもの。

それは、「空間」という視点で発想することでした。

「RESTROOM ITEM 01(ゼロワン)」は、

器具同士のサイズや形状、色などを統一し

今までになく調和のとれた どんな人にも使いやすい空間を追求。

ここから パブリックレストルームの未来が はじまります。

パブリックレストルームの新基準

RESTROOM ITEM 01



商品についての技術的なお問い合わせは

0570-01-1010 受付時間 平日/9:00~18:00 土・祝日/
10:00~18:00(夏期休暇、年末年始は除く)

または www.com-et.com

2009年度 グッドデザイン金賞



TOTO通信のお届け先などの変更はお客様No.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。

TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999

*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客様からお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(<http://www.toto.co.jp/>)をご覧ください。

TOTO通信
2010年 新春号

TOTO通信 2010年 新春号 第54巻 第1号 通巻489号
発行日:2010年1月1日 発行所:TOTO株式会社
〒154-8540 東京都世田谷区桜新町2-24-2 TEL.03(5451)1131



この印刷には、植物由来・森林認証材などの環境にやさしいインクを使用しています。